
新谷壮介シリーズ 月光

H a r r y 英仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新谷壮介シリーズ 月光

【Nコード】

N4285J

【作者名】

Harry英仁

【あらすじ】

或る寒い朝、女子留学生の他殺体が発見される。その留学生と関係があるとして壮介の友人である亮平が参考人として浮上する。留学生の表の顔と裏の顔が交差し、事態は意外な方向へと進んでいく。壮介は姿を消した友人を追うため、事件の謎に挑む。

ブローグ

見えない。

何も、見えない。

もうどれくらい歩いて、どのくらい遠くまで来たのだろうか。

目の前は真っ暗で何も見えない。ずっとこのままだ。

この先に何かがあるのかは勿論、今歩いている所は道なのかも判らない。

決して目を閉じているわけではない。ちゃんと目を開け、しっかりと前を向いているつもりだ。

なのに、なのにどうして、目の前には何も見えないんだ。

一度、立ち止まってみる。

でも、状況は変わらない。何も、変わらない。

目を閉じてみる。しかし映る景色は目を開けている時とまるで同じ。

再び歩き始める。

怖い、何だか怖い。

何も見えない、誰もいない、こんな真つ暗な所で心細く一人ぼち。

声を出しても、何の反応もない、誰にもこの声は届かない。

あまりに怖くて、寂しくなって、再び立ち止まる。

初めて正面から視線を外し、下を向く。

するとそこには足先がぼんやり見える。

少々年季が入った白いスニーカー。

この靴を履いて、今まで歩いてきた。

上空を見てみる。

そこには、小さな満月。

その満月の放つ弱くて、そして優しい光が、足先を照らしていた。

そうだ、思い出した。

こんな真つ暗闇の中、何で歩き始めたのかを。

月が、月が足先を照らしてくれていたから、どんなに寂しくても、怖くても、どこまでも歩いていけると思ったんだ。

どんなに小さくても、弱くても、それが足先を照らし続けてくれる限り、くじけずに歩いていける。

だから、これからどんな暗闇が待っているとも、歩いていけるんだ。

そう思うと、さっきまでの怖さや寂しさが嘘のように消し飛んだ。

そして、再び歩き続けた。

その先に何があるなんて判らないくせに、どんどん歩き続けた。

そう、歩き続けたんだ。

第一章 或る寒い朝の出来事

—

それは新しい年になってからしばらく経った、或る寒い朝のことだった。

場末の匂い漂う繁華街の傍を流れる川に、一人の女の死体が浮いた。

第一発見者は近所に住む六十代の男性。

定年を過ぎてから早朝のジョギングを毎日の日課としていた男性は、いつものように川べりを走っていた。

彼は毎朝ほぼ同じ時刻、ほぼ同じルートをいつもと同じように走る。それが彼の日課だった。

しかしこの日、彼は川にいつもと違うものを見つけた。

お世辞にも綺麗とは言えない、ゴミや魚の死骸が浮かぶ川。

その中に通常そこにあるはずのない、あつてはならないものを見つけてしまった……。

その後通報を受けた警察により、女の死体はすぐに引き上げられる。

引き上げられた女の身体にはゴミが付着、そして何より川の泥水にまみれたことにより、その身体からは鼻が曲がるような異臭がした。

警察が衣服等を調べている際、上着のポケットから女の物と思われる財布を発見。中にはとある短大の学生証らしきカードが入っており、そこに女の顔写真と「リン・エイミ」という名前が記されていた。

警察は身元確認のため短大へと連絡し、リンという女性が台湾からの留学生であることが判明した。

最後に死因について……、
事故？ 事件？ 自殺？
それについて警察が悩むことはなかった。
何故ならリンの左胸には鋭利な刃物で一突きされた、大きくそして残酷な傷があったのだから。

「……あ」

まだ夜も完全に空けきらぬ早朝、真つ暗な部屋で一人の男が目覚めました。

男は目を覚ましてからしばらくの間そのままの状態。それは二度寝というよりも、今自分がどういう状況なのか、自分が目を閉じる以前の状況を必死に整理し思い出そうとしているようだった。

そして男は起き上がる。

男は周りを見渡して、そこが自分の部屋であることを理解する。

「……！」

男は二日酔いのように頭をブンブンと振り、こめかみを手の平で二度叩く。

「……」

最後に額を両手で押さえる。そしてその両手は段々下へと向かい口元で止まった。

ブルッ……

男の身体が震える。冷えるのか男の吐く息は室内にも関わらず白くなる。

そして男は再び額に手をあて、呟く。

「あれは……、夢だったのか……？」

二

「おいつす」

昼休み明けの大学の講義室、壮介がカバンとコートを抱えてやってきた。

講義室には既に数人の学生がおり、教授が来るのを待っている。

そしてその中の一人が壮介の方を向く。

「おう、相変わらずの重役出勤だな」

「もう来てるんか。洋はマジメだねえ」

壮介はそう言うと言の隣に座る。

彼の名前は新谷^{しんたに}壮介^{そうすけ}。ここ羽音学院大学に通う大学二年生。黒い短髪に割と整った顔。一見どこにでもいる普通の大学生だ。

「俺は今朝イチの講義からだからな。お前は昼からでいいよな。

やっぱ冬朝早く起きるのはツライわ」

そう壮介に声をかけるのは藤田^{ふじた}洋^{ひろし}。壮介とは同学年で同じゼミに所属している。スラッと伸びた長身にフチのないメガネ、そして普段はクールに振舞っているため、どこことなく知的な雰囲気醸し出している。

この二人、入学当初は互いの名前を知っている位だったが、二回生になりゼミで一緒になってから互いの人となりを知ることとなり、結果ウマの合うことが判り、一緒に行動するようになった。

壮介はカバンを開きながら笑う。

「お前は手当たり次第に講義を受け過ぎなんだって。俺みたいに要領よくやっていかなきゃ」

すると洋は鼻で笑う。

「よく言うぜ、前期レポート提出の時、期限ギリギリまで半泣きになってレポート作ってたクセに」

「俺は過去を振り返らない主義なんだよ」

壮介の答えに洋はややオーバーリアクション気味に頭を抱えてみせる。

「レポート制作に付き合わされるカノジヨさんも大変だな……」

「ああん、ウルセーよ」

壮介は頭をポリポリと掻く。その姿を見た洋は苦笑いを浮かべな

がため息をつく。

「全くお前はいい身分だな……。ああそうだ、話は変わるけど朝電車で来る時興橋駅前にやたらパトカーが停まっていたよ。何かあったのかな？」

「あゝ、そういえば」

壮介はカバンの中からノートと筆箱を出しながら答える。

「今朝興橋の横を流れるドブ川で女性の死体が発見されたんだって、ワイドショーで言っていたわ」

「興橋の横……ってことは、潮見川のことか」

洋の言葉に壮介は無言で頷く。

「ああ、遺体の具体的な身元はまだ出てこねえけど、アジア系の外国人女性らしい」

そして壮介は今朝ワイドショーで見た情報を洋に伝える。丁度伝え終わったところで教授が部屋へと入ってきた。

「みなさんこんにちは。それでは出欠をとります……」

白髪交じりの教授がゆつくりとした口調で名前を読む。大体は教授が名前を読み上げた直後に返事がある。講義を受けるものの中には登録だけして全く受けにこない所謂「幽霊受講者」もいるが、この時期になるとそれも把握できているので、教授はあえてその者の名前は読まない。

だから欠席者がいると意外と目立つ。

「ふむ、今日は萩田が欠席とな」

教授の呟きに壮介は周囲を見回す。

「萩田君、今日休みなんだ。珍しいな」

「ああ、そうだな……」

壮介の呟きに洋も相槌を打つ。

萩田亮平^{はぎた りょうへい}。壮介・洋と同じゼミに所属する二回生。といっても萩田は一浪しているので年は壮介たちより一つ上。

萩田は非常にマジメな性格として周囲に認知されており、サボリなどを考えるような男ではない。

「萩田君、風邪でもひいたのかな……」

壮介はそう思いながら、虚空を見上げた。

講義終了後、壮介と洋は次の講義へと向かう。次の講義はゼミなので二人共向かう所は一緒。

壮介と洋は戸山^{とやま}という教授のゼミに所属している。戸山教授というのがこれまた個性的な人物であり、ボサボサの小汚い白髪頭と文系なのに何故か羽織っている薄汚れた白衣がトレードマーク。こんな風体なので女子学生受けはせず、数少ないゼミ希望者は専ら男子学生。一応数名の女子は在籍しているが、それらは他の人気ゼミの選考から漏れて流れてきたクチである。

「なあ洋、今日のゼミ発表誰だったっけ？」

壮介の問いかけに、洋は歩きながらスケジュール帳を開く。

「今日は……池山と、あ……萩田君だな」

洋はスケジュール帳を壮介にも見せる。

「萩田君は今日欠席かもな。ということは池山一人か……。確かアイツのテーマって『海賊の生きザマ』だったっけ？」

壮介の言葉を聞き、洋は鼻で笑う。

「笑ってやるなって。本人は本気なんだから、一応……」

「いやいや全く。こんなフザけたテーマが許されるのは、日本中どこの大学を探しても我らが戸山ゼミくらいだ」

そうこうしてるうちに二人は講義室の前に到着する。

「おい、壮介。あれ」

扉を開けると洋が何かに気付き、壮介に耳打ち。壮介が洋の視線の先を追うとそこには……。

「あれ、萩田君？」

そこには短髪でガツチリとした体型の男子学生、萩田亮平がいた。

「おっす」

講義室に入った壮介は、亮平の肩をポンと叩く。すると亮平はゆ

つくりと首だけを動かす。

「おう……」

亮平と目を合わせた壮介はその表情を見て少し目を見開く。

それはまるで何日も眠っていないかのように憔悴しきったものだった。

「どうした、顔色悪いぜ。身体の調子悪いのか？ 前の講義出てなかったし」

その表情を見た壮介は、何となくバツが悪くなり頭を掻く。

「風邪か？」

壮介に続いて亮平の顔を見た洋も訊ねる。

「……………」

二人の問いかけに亮平は目を伏せる。そんな亮平の姿を見た二人は訝しげに顔を見合わせる。

「なあ、だ、大丈夫か？」

壮介は腰を落とし亮平に近付く。

亮平はあまり饒舌に喋るタイプではないが、基本的に明るい男。

特に友達ともいえる壮介や洋の前でこのような表情になることは今までないことだった。さすがに壮介と洋は心配そうな表情を浮かべる。

すると亮平は視線だけを上に上げ、

「ああ、大丈夫だ」

と小さな声で壮介に答えた。

「そ、そうか……」

ようやく出てきた言葉に壮介は頭を掻く。

「あまり大丈夫そうには見えんが？」

洋は腕組みをして再び訊ねる。

「いや、大丈夫だ、すまん……」

今度はさつきより声のトーンが上がる。

それを聞いた洋は軽く息を吐き、カバンを開いて数枚の紙を机の上に置く。

「これ、前の講義のレジュメだ。お前の分取っておいたよ」

「ああ、悪い……」

亮平はその紙を手に持ち、目に通すことなく自分のカバンにしま
う。

「まあ何か判らんけど、無理すんなよ」

壮介はそう言つと、亮平は壮介たちに向けて手を挙げた。それを
見た壮介たちは自分たちの席へと向かった。

そしてその後ゼミの講義が行われる。

この日ゼミの発表は亮平だった。亮平の発表は淡々と進み、質疑
応答では誰も手を挙げずそのまま終了となる。席に戻った亮平は
ずと顔を伏せた状態だった。

壮介はそんな亮平の姿をずっと観察。すると後ろの席に座ってい
る洋から一枚のメモが渡される。そのメモには綺麗な字で「大丈夫
な感じじゃないな」と書かれてあった。

そして壮介もそのメモに走り書きをして洋に返す。

そのメモには汚い字で「俺もそう思う」と書かれてあった。

三

「では今日の講義はここまで」

戸山教授が講義の終了を告げる。

壮介はグツと背伸びをしてから使用したレジュメや本をカバンに
仕舞う。

その後、亮平の方をチラリと見る。

亮平は無表情で壮介と同じような支度をしている。

「ホント、どうしたんだろうな……」

いつもと違う亮平の様子に引っかかりを覚えるものの、壮介は席
を立つ。

その時だった。

コンコン……

講義室の扉をノックする音。

「はい？」

講義室を出ようとした戸山教授の動きが止まる。

こちら側の返事を待たずに外側から扉は開けられると、そこには二人の中年男性が立っており、ずかずかと中へ入ってきた。

「突然すみません、我々こういうものです」

男性の一人が胸ポケットからあるものを取り出し戸山教授に見せつける。それを見たゼミ生はどよめく。

男性が取り出したもの、それは警察手帳であった。

「ここに萩田亮平という学生さんはいらっしゃいますか？」

この発言に講義室中の視線が亮平に集まる。

この時、亮平はずっと顔を伏せたまま。その表情は窺い知れない。

「ああ、お前が萩田亮平だな」

すると刑事二人は動揺する戸山教授に目もくれず、亮平の傍に立つ。

「ちょっとお伺いしたいことがあるので、我々と一緒に来てもらうか？」

亮平は顔を上げる。その顔は青ざめており、視線は定まっていな

い。その姿は明らかに動揺していた。

「ほら、立て」

亮平の様子に苛立ったのか、刑事の一人が亮平の腕を鷲掴みにする

「あの、すみませんが……」

後ろから戸山教授が声をかける。

「ん、何か？」

腕を掴んでいる刑事が煩わしそうに顔を向ける。

「萩田が一体どうかしたのですか？ 彼は私の教え子の一人、知る

権利くらいはあるでしょう」

戸山教授がやや強い口調で訴える。それに対し、刑事も強い口調で返す。

「この萩田亮平はね、今朝潮見川で上がった女性殺害の重要参考人

なんですよ」

この一言により講義室が一気にざわめく。

「では彼が容疑者ということですか？」

「まだ捜査段階です。詳しいことはお答えできません。しかしずれ答えは出るでしょう」

すると刑事は亮平を一瞥し、

「ほら、早く立て！」

机がガタンと大きな音を立てる。亮平は半ば引きずられるような格好で立たされた。

「ほら、ちよつとどいて」

そしてもう一人の刑事が反対側に立ち、亮平は両脇を抱えられた状態で講義室から出された。

「おい、待てって！」

一部始終を黙って見ていた壮介だったが、いてもたってもいられなくなつたのか、講義室から出ていくのを見て立ち上がり、後を追おうとする。

「待て！」

しかし洋がそれを扉の前に立ち塞がり制止する。

「ちよ、洋！」

「今行つたつて無駄だ。ヘタすると公務執行妨害でパクられるぞ！」

洋は落ち着いた解釈で壮介を宥めるが、その表情は壮介と同じくらい紅潮していた。

「警察もバカじゃない。何か重要なことを掴んでいるから、亮平の元へ来て連れて行つたんだ。今は、見守るしかない」

洋の言葉に、壮介は顔を伏せ冷静になろうとする。

目の前で友人が警察に連行されるという場面を目撃した壮介、釈然としない思いから両手で頭をバリバリと掻き毟った。

第二章 夜、警察署の前

—

その日の夜。

満月輝く寒空の下、壮介と洋は警察署の前にいた。

「全く、お前にゃバカ負けだわ」

夜の冷え込みが身体に染みるのか、洋は身体を縮込ませる。そして恨み節のように壮介の背中に向けて言葉を投げつける。

「いくら何でもここで待ち伏せしなくなっただろ。いつまで取り調べをするかも判らない。もっと言うならここにいいのかどうかもはつきりしてねえのに」

昨日よりも冷え込みが厳しく、吐く息だけでなく鼻息まで白くなりそうな夜。そんな中、壮介たちは二時間以上もこの場にいる。堪り兼ねた洋は缶コーヒを三本消費し、近くのコンビニでトイレを三度借りていた。しかし壮介はずっとこの場に立ち続けていた。

「さつきも言っただろ」

すると壮介は振り向かず答える。

「学内のどこを捜してもあの刑事たちはいなかった。てことは学外へ亮平を連れて行ったことではば間違いない。興橋の一件で亮平を連れて行ったとしたなら、所轄であるこの警察署の可能性が一番高いんだ」

壮介の言葉に洋は二度長い瞬きをした後大きくため息。

「はいはい、判ってるよ。名探偵さん」

洋は壮介の人となりをそれなりに理解している。だから何故壮介がこのような行動を取るのかも、呆れはしているもののそれを咎めようとはしない。壮介は気になることがあると真相を導き出すまで突き進んでいく並外れた好奇心を持った男であることを十分理解し、ここまで付き合っているのだ。

そしてその好奇心が結果として数々の難問・難事件を解決に導いたことも知っていた。

洋は近くの自販機でこの日四本目となる缶コーヒーを購入する。

「うゝ、アチアチ……」

そしてそれを持って壮介の元へ。

「どうせお前さんのことだ、何か腑に落ちないことでもあるんだろ？」

洋は壮介に購入した缶コーヒーを手渡す。

「おう、サンキュ」

壮介は缶コーヒーを開け、少し口をつける。

「考えてみる、あいつら変だぜ」

「ああ、確かに変だった……というより、やり口がかなり強引だったな」

洋はあの時の一部始終を思い出す。

壮介は缶コーヒーに再び口をつける。

「あいつら逮捕状を持ってなかったろ？　ということはあくまで任意同行レベルの筈なんだ。でもあいつらはほぼ強制的に亮平を連行していた」

「まるで……百パーセント犯人扱いってか？」

洋の言葉に壮介は頷く。

「死体は今朝上がったところだ。正直司法解剖が終わったかどうか微妙なタイミングだろ？　それなのにあまりに動きが速すぎる」

寒さと、暖かいコーヒーを飲んでいるためか、壮介の吐く白い息は濃い。

「つまり、お前さんは警察が初動で亮平が犯人と踏み、そしてそれ大きな間違いだと言いたいわけだ」

「ああ、それで大体合ってる」

すると壮介は少し笑う。それを見た洋は真っ白な息を吐き出す。
「全くお前は……」

すると壮介はそれまで持っていた缶コーヒーを洋に返す。

「じゃあ洋、お前はと思う？」

突然の質問に洋はやや面食らった様子だったが、すぐに元の表情へと戻る。

「さあな……、俺は名探偵じゃないから、そこまで頭は回らんよ」

洋は壮介から渡された缶コーヒーを見つめる。

「ただ俺は、萩田君は人殺しをできるような男じゃない、そう思ってるだけだ」

そして洋は缶コーヒーをグイッと飲み干す。コーヒーの湯気でメガネが曇る。

「壮介、お前だつてそうだろ？」

洋の問いかけに壮介は無言。

ただ壮介は、ニヤリと笑っている。それが答えだった。

二

そんなやりとりを交わしてから三十分程経過した頃、警察署から出てくる一人の男性の姿があった。

「おい、あれ……」

その姿を見つけた壮介は丁度余所見をしていた洋の背中を小突く。

「来たか？」

洋は警察署の方へ向き直る。そして壮介と共にその姿が誰なのか目をこらす。

そして男性が近付いてくるにつれて、それは確信に変わっていく。

「「おっ！」」

壮介と洋は同時に声を上げ、顔を合わせる。

その男性、顔を伏せて歩いているためその人相や表情を窺い知ることにはできない。しかし背格好や着ている衣服から、萩田亮平であることにほぼ間違いなかった。

「ほらビンゴだろ」

壮介は洋に得意げな顔をみせる。

「はいはい、判ったよ。で、どうするんだ？」

洋は壮介から警察署へ行き亮平を待ち伏せすると聞いていたが、亮平を見つけた後のことを聞かされていなかった。

「お、おい壮介」

しかし壮介は洋の問いに答えず前へ出る。

壮介の足は一直線に亮平の方へと向いていた。

「萩田君！」

三メートル程の距離にまで近付いたところで壮介は亮平の名を呼ぶ。

「……………」

その時、亮平の足が止まる。そしてゆっくりと顔を上げる。

「萩田君……………」

壮介と亮平は視線を合わせる。外灯の下、亮平の表情はやや青白いものとなっているが、その他は大学で会った時と変化はなかった。……………」

先に目線を切ったのは亮平の方だった。警察署と出てきた時と同じように再び顔を伏せる。そして静かに歩き始める。

「なあ、何があつたんだ？ 心配したんだぜ」

壮介はそう言いながら亮平の元へ駆け寄る。

「え……………」

しかし亮平はそんな壮介を無視するかのように、立ち止まらず歩き続ける。

「な、なあ、萩田君！ 何があつたんだよ？ 教えてくれよ！」

動揺した壮介は亮平の後を追いつ、横に並ぶ。そして門の所まできたところで洋もそれに加わる。

「萩田君……………」

しかしその亮平の様子を見て、洋はその足を止める。

「おい、壮介」

洋は追いつがる壮介の腕を掴む。

「な、なんだよ！」

腕を振り払おうとする壮介に、洋は眉間に皺を寄せて首を振る。

「ひ、洋……」

「俺もよく判らないけど、今は止めておいたほうがいいというのだけは判る……」

そう言った後、壮介の腕を掴む力を強める。

「壮介、今は空気読め」

洋は一層の目力を込める。その表情に壮介は言葉が出ない。

「……………」

壮介の力が緩んだところで洋は手を放す。

「悪い、洋……」

壮介は申し訳なさそうに視線を落とす。

「……………」

その時、洋は亮平が立ち止まり、背中越しに視線を送っていたことに気付く。

洋はその視線に喰らいつく。

すると亮平は視線を切り、再び歩き始める。

洋はそんな亮平の背中に視線を貼り付けたまま動かない。

洋も壮介同様、亮平に訊きたいことは沢山あった。しかしそれをグツと堪え、その場を動かなかった。

そして壮介がそんな洋の様子に気付いて振り向いた時、亮平の姿はもうそこにはなかった。

三

とてもとても寒い、煌々と輝く月明かりさえも青白くて冷たく感じるそんな夜、

男は一人頂垂れて歩いていった。

その男の表情に生气というものは感じられない。
あえて感じるものがあるとすれば、それは絶望。

男はただ歩き続ける。どこへ向かっているのかまるで見当がつかない。

それはまるで制御不能となり、バッテリーが切れるまで動き続けるロボットの様。

男は今何を考え、何を想っているのか。
傍目でそれは判らない。

ただ男にとって、とてもとても辛いことがあった。
それにより、男は絶望してしまった。

男は何も話さない、口に出さない。
しかし男の表情、顔色、背中、足取りから、それだけを感じるこ
とができた。

空には満月。

抜殻のような男を冷たく・弱く・優しく照らす。

ネオンや外灯で照らされた街。
そんな中、空に輝く満月も男を照らし続ける。

男は気付いているのだろうか。
絶望してしまった自分を照らす満月の存在を。

この満月は知っているのだろうか。
この男が知ってしまった絶望を。

男がこれから歩んでいこうとする路の先を……。

第三章 消息不明

—

興橋の横を流れる潮見川でリン・エイミという女子留学生の他殺体が発見されてから一週間……。

その間、ニュースやワイドショーではこの事件が連日トップニュースをかざっていた。

その一因として、殺されたリン・エイミという女子留学生の素性について大きく割合を占めていた。

最初にリンの顔写真が公開され、その容姿端麗な姿にワイドショー等は「美人女子留学生」「台湾美少女」といった肩書きを競うかのようにつけていった。

また台湾の実家についても報道され、実家は貧しい家庭であることが知らされると、リンは苦学して日本へ勉強にやってきた立派な留学生であると新聞・TV等のメディアは伝えた。

事件発覚からすぐにリン・エイミは、貧しい家庭から一家の将来を支えていくために単身異国の地にやってきて真面目に勉学に励んでいたが、不幸にも何者かの手によって殺害され川に捨てられてしまった美人留学生。……といういわば「悲劇のヒロイン」という人物像がメディアによって創り上げられていった。実際ワイドショーではリンに対して同情的な報道がなされ、コメンテーターが思わず涙ぐむ一幕もあった。

こうしてリンは日本全国から「悲劇のヒロイン」として同情の念を向けられることとなる。

しかしこの「悲劇のヒロイン像」はある報道によって一変する。それは遺体が発見されてから四日後のあるスポーツ新聞に掲載された記事。

その記事とはリンが行っていたアルバイトについて。

リンは奨学金により留学しており、学校が終わった後は学校近くの飲食店でアルバイトをしていた。それ自体はどこにでもあること。しかしリンにはもう一つのアルバイトがあった。飲食店でのアルバイトを「表」とするなら、そのアルバイトは明らかに「裏」のアルバイトだった。

そのアルバイトとは興橋にある回春アジアエステ店。そこでリンはエステ嬢として男性を相手に接客をしていたことが発覚した。しかもそのエステ店は密かに違法行為を行っており、一万円前後でエステ嬢に「本番」という名の売春行為をさせていたのである。勿論、リンもその例に漏れることはなかった。

この報道により、リンの「悲劇のヒロイン像」は一瞬のうちに崩壊する。メディアは手のひらを返したかのように、連日リンをバッシングする報道を行う。

またリンが就学ビザで入国しているということもあり、実のところリンは「留学生」という肩書きを隠れ蓑にし、ブローカーを通じて計画的に日本へ売春目的で入国したのではないかという憶測を呼んだ。ワイドショー等では「元売春婦」を名乗るアジア人らしき女性、モザイク越しに実体験を泣きながら吐露するという胡散臭い特集まで組まれ、リンもその内の一人であるという結論に至っていた。

こうしてリン・エイミという留学生は、この一週間の間で印象が「悲劇のヒロイン」から「アバズレ女」へと全く正反対なものとなり、「死んで当然」等と激しいバッシングに晒されることとなる。またリンの実家にも心無い嫌がらせをする輩まで現れる始末であった。

そんなこの一週間の報道の移り変わりを、壮介と洋は複雑な心境で見守っていた。

見守るしかなかった。何故なら、事件の参考人である萩田亮平が

警察署の前で別れて以来、行方を暗ましてしまったから……。

二

「おい、壮介」

講義が終わって部屋から出たところで、洋が何かに気付き壮介の肩を小突く。

「ああ……」

壮介もそれに気が付いているようで表情は変えない。

壮介と洋の視線の先……、そこにはスーツを着た二人の男性が立っている。

壮介と洋はその二人に見覚えがあつた。いつか亮平を参考人として「連行」していた刑事たちだった。

洋はため息をつく。

「またかよ……」

二人と視線が合うと、洋は眉間に皺を寄せ、壮介は頭をガリガリと掻いた。

二人の刑事は壮介たちが一歩踏み出す前に近付いてきて、行く手を阻む。

「どうも、学業お疲れさま」

刑事の一人が壮介たちを上から見下ろすような口調で話す。

「はあ……、またですか？」

「よっぽどヒマなんですかね？」

半ば呆れた表情の壮介と、眼鏡越しに眼光を鋭くする洋。反応はそれぞれだが、二人共刑事の態度に萎縮はしなかった。

二人の返答に刑事の一人がムツとした表情を見せるが、もう一人の刑事が制止する。

「これがうちの仕事なモンでね。悪く思わんでくれ」

そして刑事は胸ポケットから手帳を取り出す。

「で、あれからどうだ？ 萩田亮平から何かしらのコンタクトはあ

ったのか？」

「ねえよ、何にも」

刑事の問いかけから殆ど間をおくことなく、壮介は答える。その横で洋も無言で首を振っていた。

「本当か？」

刑事の一人が壮介に詰め寄る。

「本当だよ」

いい加減壮介もイラついたのか、自分たちを見下した態度を取る刑事を睨み付ける。

「お前ら、本当のことを言っておいたほうが身の為だぞ」

「くどいぞ！」

今度は洋が苛立ちを声に出す。

「……………」

「……………」

壮介と洋、刑事二人はその場で睨み合う。国家権力に対し、壮介たちは一歩も引かなかった。

「チッ」

そのうち、刑事の一人が舌打ちをして一歩後ろへ下がる。

「では今日の所はこれで失礼するよ。また何か判ったことがあったらすぐ警察に連絡してくれ」

「いいか、絶対だぞ！」

そう言い残し、刑事二人は踵を返しその場を後にした。刑事が姿を消すと、今度は壮介と洋の同級生たちが周りを囲む。

二人は同級生たちから質問責めを受けるが、無論それらには付き合わない。壮介と洋は同級生を巧く交わしながら、刑事たちとは違う方向からその場を後にした。

風が強い校門への道、壮介は頭をガリガリと掻き毟る。

「おい、よせつて。フケがこっちへ飛んでくるだろ」

洋はそう言いながらコートについた白い粉を払う。

「なあ洋、お前は実際どうなんだ？ 萩田君からの連絡」

洋は壮介の問いかけが少し意外なものだったようで、その瞬間メガネの奥の瞳が大きくなる。

「いや、全くの音沙汰無しだよ。そういうお前さんはどうなんだよ？」

すると壮介は手のひらをヒラヒラさせる。

「同じってことが……」

洋は大きなため息をつく。

二人が最後に亮平と会ったのがあの警察署での一件。それから亮平は大学に姿を見せなくなってしまった。アパートにも戻っていない様子でケータイも電源が切られている。壮介は一応亮平の実家にも連絡を入れるが、こちらも連絡がとれず亮平の両親はかなり困惑していた。

「あとは萩田君が行きそうな場所か……」

壮介が独り言のように呟く。

「壮介、どっか心当たりはあるか？」

洋が訊ねると、壮介はその場に立ち止まってしまった。

「うーん、全く見当がつかないや……」

そして壮介は頭を掻き篸る。

「そうか……。俺もお前さんと同じだ」

洋はそう言い空を見る。

太陽はもう西に傾き、澄んだ冬の空気は夕焼けを一層美しくする。そしてその夕焼け空にはもう白い満月が姿を現していた。

三

その日の夜、壮介がアルバイトを終えて寒い夜道を自転車で家路についている時、ズボンのポケットに入れてあるケータイのバイブが震えた。

壮介は丁度前を通りかかったコンビニの駐輪場に自転車を止め、

ズボンからケータイを取り出す。画面には見慣れない番号が表示されていた。

「もしもし、新谷です」

壮介は恐る恐るながら出てみる。

『……………もしもし』

しばらく間があつた後、若い女性とおぼしき小さな声が聞こえてきた。

『あの……………突然すみません、新谷壮介さんですか？』

その声は震えて、ややおどおどしたもので聞き取り辛いもの。壮介はケータイを耳にグツと押し付ける。

「あ、はい……………そうですね、あなたは？」

『あ、すみません申し遅れました。私、川奈晶子かわな あきこと申します」

「川奈……………さん？」

壮介は川奈晶子という名前について思い出してみる。しかし記憶のどの引き出しを開けてみても、そのような人物の名前を聞いたことがなかった。

この人物は一体誰なのか、そもそも何故自分のケータイ番号を知っているのか……………壮介は電話の向こうにいる女性に対して警戒心を強める。

「で、俺に何か？」

『あの……………実は萩田亮平についてお伺いしたいことがあって、突然お電話させてもらいました』

萩田亮平……………その名前を聞いたその瞬間、壮介に緊張感が走る。

「あなたはいった……………」

『萩田が今どこにいるか、ご存知ないでしょうか？』

壮介が言葉を発するよりも早く、晶子は訊ねてきた。その言葉にはかなりの焦りを含んでいる。

『全然、連絡が取れないんです。家にも帰ってないみたいだし、もう何が何だか判らなくて。それに……………』

晶子は矢継ぎ早に自分の想いを吐き出してくる。壮介は話を遮る

うにもそのタイミングを計れないでいた。

『今までこんなこと一度もなかったのに、私、私……どうしたら』
一頻り話した後、晶子の言葉が一瞬途切れたところを壮介は聞き逃さなかった。

「か、川奈さんだっけ？ とりあえずいいかな」

壮介はケータイを持つ手とは反対側の手で頭をポリポリ搔く。

「あゝと、まず萩田君に聞いてみただけで、単刀直入に言うとなんか音信不通なんだ。どこに行ったのか全然判らない」

すると電話の向こう側で晶子は黙り込んでしまった。

「とりあえず、今のところ俺たちは向こうからの連絡を待つしかない」

『そ、そうですか……』

その声には明らかに落胆の色を滲ませていた。

ここで壮介は逆に自分の疑問を訊ねてみる。

「ところであなたはどのようにして俺の連絡先を知ってたんだ？」

するとしばらくの沈黙後、晶子は答える。

『はい、以前萩田が親しい友人の方として新谷さんのことを話していました。連絡先は萩田が私の家に置いていた学生名簿から拝借させてもらいました。すみません、突然このような形で連絡してしまつて』

「萩田が晶子の家に置いていた」。この言葉に壮介は違和感を覚える。

「あの失礼だけど、あなたと萩田君ってどのような関係？」

すると晶子はボソボソと聞き取り難い声で答える。

「はい、私と萩田は付き合っていました。最近、別れてしまいましたけれど……」

萩田亮平に恋人がいた。

その事実には、壮介は本人に失礼とは思いつつも驚きを隠せず思わず口を半開きにしてしまった。

「あゝはいはい、そうなんだ、それでね」

別れた男を心配するということは、つまりはそういうことか……と壮介は不要な想像を張り巡らせていた。

『それでは、失礼します。どうも突然すみませんでした』

「あ、いえいえ。また何か判ったことがあったら、連絡して下さいな」

壮介は電話を切った。そしてすっかり冷えてしまった身体を温めるために、自転車から降りてコンビニへと入る。

雑誌コーナーで雑誌を立ち読みしながら壮介は思う。

萩田亮平、罪な男だな……と。

第四章 フラワー

—

「おい、ニイちゃんや」

寒い夜のお城公園、ホームレス風の男性がベンチにうずくまる若い男性に声をかける。

「……」

「こんな所でそんな格好で寝てたら風邪引くでな、おい、起きいな」
声をかけても返答がないのを不審に思いながら、ホームレス風の男性は近付いて、その身体を軽く揺すってみる。

「……」

「おいってな！」

ホームレス風の男性は「もしや!？」という不安がよぎり、身体を強く揺さぶってみる。

「……ん」

何度か揺すっていると、ようやくその若い男性は小さく反応した。
「やっと起きたか……。死んどるんかと思ってたわ！」

ホームレス風の男性はそう言い安堵の表情を浮かべる。

「……………」

ベンチにうずくまっていた男性は首を左右に振り顔を抑える。そして寒さからか肩をブルツと震わせる。

「ニイちゃん、目え覚めたか？ そやったらそこどいてくれへんか？ ここはオツちゃんの場所やねん」

そう言うところホームレス風の男性はベンチの端に持っていた荷物を置き、中から毛布やダンボールといった防寒具を取り出す。

ホームレス風の男性が寝支度を始めるのを見ると、その男性はベンチから立ち上がり夜の闇へと消えていく。

「ニイちゃん、今夜は寒うなるからの、気いつけやー！」

ホームレス風の男性は闇に消え行く背中にそう叫んだ。

男は夜のお城公園を歩く。

広大な公園の周囲は木々で覆われ、周辺市街の喧騒から逃れることはできるが、その反面灯りに乏しく道を照らすのは所々に設置されている弱々しい外灯のみだった。

そして少し道から外れてしまうと、その灯りは殆ど届かなくなってしまう。二、三メートル先どころか、足元さえはつきりと確認できない暗闇。

男は空を見上げる。

木々の間から僅かに空が見える。

曇っているのか空に月は出ておらず、暗幕を被せたかのように真っ暗であつた。

「……………」

男は空に向かって呟く。

彼が何を呟いたのか、それは判らない。

ただ、彼は……、

それを今は見えない月に向かって放っているように見えた。

二

「壮介、ここだ、ここの三階だ」

洋がある雑居ビルを指差す。

「なんか似たような店が入ってんな」

壮介はその雑居ビルを一望して呟く。

壮介と洋、二人は今興橋の歓楽街の一角にいた。

そして二人が辿り着いた場所、それは殺されたリン・エイミが働いていたとみられるアジアンエステ店が入居しているビルであつた。そもそもの言いだしっぺは勿論壮介だった。

姿を消してしまった亮平の追うために、壮介は事件の真相を探るべきと考えた。そのためにはまずリン・エイミとはどういう人物だったのかを知る必要があった。リンの素性についてはワイドショーが連日報道していたが、今回壮介はマスコミ報道を鵜呑みにすることをせず、自らの調査で得た情報を優先することにした。

壮介の行動に、洋は勿論反対した。何故ならそれはあまりに無謀であり、真相に辿り着く可能性は殆どゼロだと思ったからであった。しかし最後は壮介の「並外れた好奇心」に馬鹿負けし、そして腐れ縁とばかりについていくことにしたのだった。

また洋はこの殆どゼロの可能性に、心の片隅で期待していた。

洋は壮介が「並外れた好奇心」を発揮した結果、数々の難問・難事件を解決してきたことを知っている。だから、もしかしたら今回もそれを見ることが出来るのでは……と考えていたのだった。

「ここの三階だったよな？ 店の名前は？」

「あそこに出てるぜ」

壮介の問いに洋は雑居ビルの入り口を指差す。そこにはエステ店のネオン付看板が所狭しと転がされていた。

「うわあ、このビル全部がコレ系かいな」

「興橋じゃよくあるモンだぜ。おい壮介、どれが三階か探せって」

二人は三階店舗の看板を探す。そして程なく発見。

「アジアンエステ フラワー か」

それは向日葵と並んで若い女性が微笑んでいる看板。一番下には

「三十分 四千元」と書かれてあった。

「さて、どうするよ？」

洋は看板に腕を置き、壮介に訊ねる。しかし洋は答えを聞かずとも、これからどうするか判っているようだった。

「決まってるっしょ！」

そう言つと壮介は乱雑に転がっている看板を横目に見ながら、「フラワー」のある三階へと通じる階段を上がる。

「全く、同じ学部の子に見られたら言い訳できねえよ」

洋は周りに顔見知りがないかを確認して、壮介の後を追いつき雑居ビル内へと入っていった。

三

『しばらくの間休業します』

三階の扉にはそう書かれた張り紙が乱暴に貼り付けられていた。

「まあ当然といえば、当然か。こんだけ騒ぎになってんだから」

張り紙を前に洋は冷静に解説する。

壮介は扉に手をかける。

鍵がかけられているようで、押しても引いても扉はビクともしなかった。

「中の様子、判んないかな」

壮介は周囲を調べてみる。しかし窓もないので中の様子を窺い知ることができない。

「あゝん、しまったなあ。もう少し早く来たらよかった」

壮介はそう言いながら頭をガリガリと掻きまわす。

「念のため、他のフロアも見回ろうぜ。何か判るかもしれないし」

洋は気落ちする壮介の肩をポンと叩く。

「俺は下のフロアを見てみるから、お前さんは上のフロアに行ってみてくれ」

「おお、判った。頼むわ」

そして壮介と洋は二手に分かれて雑居ビル全てのフロアを見てまわる。

この雑居ビル自体は六階建の細長い構造となっており、ワンフロアに一つのテナントしかない。

要はその階のテナントが開いているか閉まっているかを調べるというわけで、それ程時間のかかる作業ではない。

そして上から順に調べてきた壮介、四階で下から上がってきた洋と合流した。

「おう、どうだった？」

壮介が声をかけると洋は無言で首を振った。

「そうか、こつちもだ。どれも閉まつてる」

壮介は再び頭を掻き毟る。このビル全体閉店状態という意外な状況に、壮介は少し苛立った。

「看板はちゃんと出ているのにな。つけっぱなしは電気のムダだぜ」
洋も少なからず壮介と同じ心境のようだった。メガネを外し、前髪をかき上げる。

「おい、どうするよ」

洋はメガネをかけ直して壮介に訊ねる。

「どうするもなにも、もぬけの殻状態のビルにいたってしょうがないだろ。出直そうぜ」

そう言つて壮介は階段を降りようとした。

その時。

三階のフロアで物音がした。

その音に気付いた二人は、思わずその場にしゃがみ込み身を隠す。そして二人は一瞬顔を合わせ、無言で三階フロアを密かに見下ろす。

すると三階フロア、フラワーの扉が開き、中から一人の女性が出てきた。

女性はファアのついた白いコートを着込んでおり、旅行カバンのような大きめのカバンを肩から提げていた。

「……」

女性が周囲を見回すのを見て、壮介と洋はさらに身を隠す。

そしてカチャンという、鍵をかけるような音をした後、女性はエレベーターに乗って下へと降りていった。

いなくなったのを見計らい、二人は立ち上がる。

「おい、壮介！ 今の人フラワーから出てきたぞ」

洋がやや興奮気味に言う。

「判つてる、行くぞ洋！」

そして壮介と洋は駆け足で階段を降りていった。

二人が雑居ビルの前に出ると、フラワーから出てきた女性は五十メートル程先を早足で歩いていていた。

「壮介、あれ！」

洋が壮介に女性の背中を示す。

壮介も女性の背中を確認し、その後を追う。

早歩きから駆け足に、そのスピードは徐々に速くなる。

そしてある程度の距離にまで追いつき、声をかけようとしたその時だった……。

その女性はある建物の中へと入ってしまった。

壮介はその建物の前で立ち止まる。女性はエレベーターに乗って上にいってしまった。

壮介はエレベーターの停まる階を確認する。

エレベーターは四階で停まった。

「どうした、壮介」

程なく洋が追いつく。

「なあ洋、このビルの四階って何だ？」

そう言いながら壮介は一旦ビルの外へ出て看板を確認する。

「あ、壮介、これ四階だ！」

看板を見つけたのは洋が先だった。

そしてその看板に書かれていた店名、それは「出会い喫茶 キュ
ーピット」であった。

第五章 キュービットでの出会い

—

「はい、いらつしやい」

キツネのような顔をした店員が壮介と洋を出迎える。

今二人がいるのはフラワーから出てきた女性が入った雑居ビルの四階。そこに店舗を構える出逢い喫茶「キュービット」であった。

二人ともこのような店にやってきたのは勿論初めて。おどおどしながら扉を開き店内へと入った。

「ご利用ははじめてですか？」

店員の言葉に無言で何度も頷く二人。

「では、当店のシステムをご説明致しますので、どうぞこちらへ」

キツネ顔の店員が出てきて、二人を店内の奥へと促す。

その時壮介は店員の右胸に付けられている名札を見逃さなかった。

そこには「興橋店 店長 江嶋武雄^{えじまたけお}」と記されていた。

「こちらが男性用のスペースとなっています」

まず二人はこの「キュービット」のシステムの説明を受ける。

店内は一つのフロアを半分に間仕切りして男性用と女性用のスペースで分けており、入店するとそれぞれのスペースに誘導される。

男性は入店料等の料金が必要だが、女性は完全無料で過ごすことができる。男性スペースにはモニターが設置されており、そこには女性スペースの様子が映し出されており、その映像を観て気に入った女性がいれば、その女性を別にある個室へと連れ出し、一対一で話ができる。そこでどんな約束事……例えば援助交際の交渉をしているても、店側は一切関知しないという仕組みとなっている。

壮介と洋は今まで自分たちの知らない世界を垣間見た心境であり、

ばかーんとした表情で店員の説明を受けていた。

説明は五分程で終わり、店員はさっさと受付へ戻っていった。

壮介と洋はキョロキョロしながらモニター前のベンチに腰掛ける。男性スペースには二人以外の客はいない。

「さて、勢いで来たはいいけれど、これからどうするよ」

洋が壮介に訊ねる。洋はあまりこの場所に留まりたくない様子。

「決まってるだろ、あの女性を探して、話を聞くんだ」

場慣れしないものの、壮介は女性スペースが映し出されたモニターに見入る。

モニターに映し出されている女性は三人。どの女性も顔立ちからして、もう若くないという感じ。

「なあ洋、どれだと思う？」

「うーん……」

壮介の問いに洋は嫌々ながらモニターを確認する。

そして、

「この人じゃないか？ この左端に座ってタバコ吸っている人」

洋はモニターを指差すと、壮介は頷く。

「ああ、俺もその人じゃないかって思ってたんだ」

「じゃあ、いちいち訊くなよ」

洋が壮介の肩を小突く。

「一応確認したかったんだよ。じゃああの人と会ってみるわ」

そう言うつと壮介は受付の方へ移動する。

「待て、壮介！」

しかしそれを洋が止める。

「壮介、ここはシステムの長く話すことができない。できたら店外へ連れ出すように話を纏めてくれ」

それを聞くと壮介は右手の親指を立てる。そして、

「トーク料と連れ出し料は割り勘だからな」

この「キューピット」、個室で女性と話するには「トーク料」として千円。一緒に店外へ出るには「連れ出し料」として二千円必

要であつた。

二

受付で千円を支払つた壮介は、店員の誘導で別室へと案内される。案内された部屋は小さな四角いテーブルとイスが置かれた狭いスペース。壮介は奥のイスに座るよう指示を受ける。

店員が去ると壮介は一人残される。

「何かタバコ臭いな……」

テーブルには汚れた灰皿が一つ置かれていた。

そして程なく、コツコツと足音が聞こえてきた。

姿を見せたのは、あのフラワーの前で見た女性だった。

「こんにちは」

女性はニコリと笑う。それに合わせて壮介も会釈をする。

「ここは、初めて？」

そう言いながら女性は壮介の向かい側に座る。ここで壮介は女性の姿をはつきりと見る。女性は見た目三十代後半、化粧はきっちり施しているが、それがかえって年齢を感じさせている。

「あなた、名前は？」

女性は持つていたカバンからタバコを取り出す。

「新谷……です」

壮介は相手の出方を窺いながら答える。

「貴女の名前は……」

「冴子。仁藤冴子よ」

仁藤冴子はタバコを咥え、火をつける。

「あなた、店から私のこと尾けてたでしょ？」

その言葉を聞いて壮介から血の気が引く。思わず頭を掻き毟りそうになるのを必死に堪えた。

「気付かれてないつもりだったわけ？ もう丸判りよ、三流探偵さん」

「あ、いや、その……」

壮介は何かをしゃべろうとするが、言葉が見つからない様子。また口の中がカラカラになってきていた。

「私に何か用？ 何が目的？」

冴子はタバコをふかしながら話す。壮介を問い詰めてはいるが、その表情は穏やか。尾行を見破られて動揺する壮介の姿を楽しんでいるかのようだった。

すると壮介は堪らず頭をガリガリ掻き耑る。とうとうヤケになったのか。

「もうバレちゃ仕方ないな」

壮介は頭を掻きながら苦笑いを浮かべる。その姿を見て冴子も薄っすらと笑う。

「確かにお店の前から後をついてきました。スンマセン……」

壮介は両手を膝において頭を下げる。

「いいわよ別に。……で、何か私に用なの？」

冴子は笑いながら首をゆっくりと振る。その仕草には大人の女性の柔らかさがあった。

「はい、実はお伺いしたいことがありまして……」
すると冴子はタバコを灰皿に押し付ける。まだ半分も吸っていない。

「でも、何かここじゃ話し辛そうなカンジね」

壮介は再び頭を掻きながら苦笑い。

「参ったな、そこまでお見通ししてわけですか」

そう言った後、壮介は顔を引き締める。

「ちよつとここでは色々と具合が悪いんです、場所を変えさせてもらえませんか？」

すると冴子も目つきが変わり、何故か部屋の外の様子を窺う。

そして、大きなため息。

「どうせ内容は、アレでしょ？ いいわよ、暇だし悪い子じゃないみたいだし相手したげるわ」

そして冴子は立ち上がる。

「近くに私の知ってる喫茶店があるの、いい所だからそこへ行きましょ」

その言葉に壮介は頭を下げる。そして壮介も立ち上がる。

「あと、もう一人連れがいるんですが、大丈夫ですか？」

壮介は洋のことを伝える。

すると冴子は何かを思い出したかのような表情を見せる。

「ああ、さっき江嶋に女の子とのトークを迫られて困ってたメガネの子ね」

そして冴子はニコツと笑う。

それを聞いた壮介は洋の受難を思い、ただただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

壮介はここへ来て、冴子と出会ってから何度苦笑いを浮かべたことであろうか。

いつの間にか壮介は、冴子の手の平に乗せられていたのであった。

三

三人はキューピットから歩いて五分程の所にある喫茶店へと入る。モダンな雰囲気店内に、壮介と洋は興味深そうにキョロキョロする。

「こっちのテーブルに座って頂戴。二人ともコーヒーでいいでしょ？」

冴子が一番奥の四人掛けのテーブルに二人を促す。入り口からは観葉植物の陰となり、そこに誰が座っているのかは見えない。

二人を促すと冴子は奥側のイスへと座る。そして壮介と洋は手前のイスに並んで座った。

「いいカンジの所でしょ。私のおきによ」

程なくして初老の男性によりコーヒーが三つ運ばれてくる。そし

て冴子はタバコに火をつける。

「ここ、テーブル席はタバコ吸えるけれど、カウンター席は禁煙になってるの」

壮介は振り向き改めて店内の様子を見る。確かに使用されているテーブル席の全てでタバコを吸っている人はいたが、カウンター席では誰も吸っていないかった。

「何故だと思う？」

冴子は二人に訊ねる。

「さあ……、何ででしょうね？」

洋は苦笑いを浮かべながら首を振る。

「理由はガスレンジの換気扇の場所じゃないですか？」

壮介は冴子の方へ向き直り答える。

「どうして？」

冴子はニヤリと笑いタバコを燻らせる。

「見たカンジ、換気扇はカウンター奥のガスレンジ上にある。あれを回している状態でカウンターのお客さんにタバコを吸われたら、煙がカウンターでコーヒーを作っている人に向けていっちゃいますよね」

すると冴子は一呼吸置いた後で手を叩く。

「ご名答。ご褒美に三流探偵から二流に格上げしてあげる」

その言葉に壮介は頭をポリポリ掻く。

「昔はね、カウンターでもタバコが吸えたんだけど、あなたの言った理由でマスターが喉を悪くしちゃったの。マスターももうトシだしこれ以上悪くなったら堪えないってことで、カウンターだけ禁煙になったのよ」

冴子はまたタバコを半分くらいで灰皿に押し付ける。

「で、そろそろ本題に入るわよ」

冴子の表情が変わる。……が、それは一瞬だけですぐにその口元は緩む。

「どうせ聞きたいことって、ボタンちゃんのことでしょ」

「ボタンちゃん？」

予想していなかった名前に壮介と洋は顔を見合わせる。

「ボタンちゃん……、この間死んじゃった娘の、店での源氏名よ」

冴子は視線を落とす。その先にはブラックのコーヒー。そこに映るのは冴子の曇った表情。

「日本語はあまり上手い方じゃなかったけれど、明るくて優しく、こんな仕事も一生懸命だった。あんないい子が、殺されちゃうなんて……」

そう言つと冴子は一度コーヒーに口をつけ、二本目のタバコを取り出す。

「リンがどういう経緯でお店に入つたかご存知ですか？」

壮介が訊ねると再び冴子の表情が変わる。今度はずっとそのまま。うちの店長は国外の売春組織のブローカーと通じて、中国や台湾・韓国なんかから女性を引っ張ってきてた。大体、お金が必要な訳アリな女よ」

言い終わった後、冴子はどこか遠くを見ていた。

「リ、リンもその内の一人というわけですか？」

今度は洋が訊ねる。緊張しているのか洋のコーヒーはもう空っぽになっていた。

すると冴子は深く頷く。

「本人から聞いた話だけれど、お父さんが事業で失敗して多額の借金を抱えたんだってさ。それでお金が必要となつて……」

「留学生の名目で日本へ入国してきたと」

冴子の言葉を壮介が繋げる。その言葉に冴子は頷く。

「別に売られてきたわけじゃないのよ。本人の意志でこんな仕事をしてるのよ、一応ね」

冴子は「一応」という言葉に力を込める。聞き手には皮肉にしか聞こえない言い方である。

「リンの周りで何かトラブルらしいことはありましたか？」

壮介の問いに、冴子はしばらく考え込むが、その後ゆっくり首を

振る。

「私の知るところでは……。カンジのいい娘だったし、お客さんからのクレームもなかったと思う」

冴子は二本目のタバコを灰皿に押し付ける。

「ただ……」

冴子の言葉に壮介と洋は横目で視線を合わせる。

「うちの店長、嵯峨野栄太さかの えいたってんだけど、やたらボタンちゃんに入れ込んでたわね。ボタンちゃんを嵯峨野が自分の女にしようとしてたんじゃないかって、一時期噂になったことがあるわ」

言い終わると冴子はコーヒーに長く口をつける。その姿を見ながら壮介は頭を掻く。

「い、今、その嵯峨野という人は？」

洋は喉がカラカラで上手く声が出ない。壮介は自分のコーヒーを洋の前に差し出す。その光景を見て冴子は笑う。

「そういえばお冷が出てなかったわね。ねえマスター！ お冷みつー！」

冴子がカウンターで作業をしている初老の男性に叫ぶ。間もなく初老の男性がお盆にお冷を三つ載せてやってきた。

冴子もコーヒーを飲み干していたので、一度お冷に口をつける。

「嵯峨野は例の事件以来警察の事情聴取責めよ。ボタンちゃんのことともさることながら、風営法的一件でもね。売春エステってマスコミが騒いだから、普段は大甘の警察も一応のポーズとらなくちゃいけないになったわけ。おかげで店は無期限休業。嵯峨野がやってる他の店も一緒よ」

「ということは、あのビルに入っているお店全部……ってことですか？」

壮介の問いに冴子は目を閉じて頷く。

「真面目に働いていたこっちにはいい迷惑よ。おかげで平日の昼間っからキューピットで油売らなくちゃいけなくなったのよ。あ、因みにあそこの店長の江嶋、アイツ元嵯峨野の部下で、前はフラワー

の店員だったのよ」

そして遂に冴子はここへ来て三本目のタバコを取り出す。

「あ、あの、もう一つ聞いても、いいですか？」

洋が言葉を詰まらせながら訊ねる。その姿にとうとう壮介も吹いてしまった。

「ど、どうして冴子さんはフラワーで働いているんですか？」

洋の問いに、ライターで火をつけようとしていた手が止まる。

「報道じゃフラワーってアジアンエステで、外国人女性が中心だったと聞いてます。なのに……」

「何で日本人の私が働いているのかって？」

冴子は火のついていないタバコを灰皿の上に置く。

「フフ……、イタいとこついてくるわね。二流探偵から一流に格上げね」

すると冴子は壮介のように髪の毛を掻き毟る。

「私、こう見えても昔は神戸のソープで働いてたの。No.1にだってなったことあるし、月に二百万稼いだことだってあったわ」

そして冴子は置いてあったタバコを咥え、火をつける。

「歳をとるって怖いわね。昔はあんなにちやほやされたのに、三十過ぎて身体にハリがなくなってきたらもう誰も相手にしてくれなくなっちゃった。若い頃は一回五万円の女だったのが、今じゃ一回九千八百円の女よ」

遠くを見つめる冴子の言葉に、二人はどう反応していいか判らず困惑の表情を浮かべていた。

「ああごめんなさいね。変な話しちゃって」

そう言うとき冴子は吸いかけて間もないタバコを灰皿へと押し付けた。

「ああ、いえいえ。ははは……」

壮介は苦笑いを浮かべながら頭を掻いた。

「あの……、冴ちゃん」

会話が途切れたところでマスターである初老の男性がやってきた。
「嵯峨野さん、来てるよ」

その言葉に壮介が振り向こうとするが、冴子はそれを止める。

「わかった。そっちに行くわ」

冴子は嵯峨野が来ているのを知っていたのか、大した動揺はしていない。

「んじゃ、私行くね。あ、会計はよろしくね」

席を立ち上がると冴子は伝票にキスマークをつけて壮介の前に置く。

「ああ、はい。そういうお約束ですからね」

壮介は伝票を受け取り、席を立つ。

「カウンターに端に座ってるイカツイ男が嵯峨野。先にあなたたちが出て行つてね」

ここで壮介たちは嵯峨野の後姿を見る。パンチパーマに派手なシヤツで一見すると「その筋の人」だ。

「ではお先に失礼します。長い時間ありがとうございました」

壮介と洋は冴子に会釈をする。

「いえいえこちらこそ。服タバコ臭くしちゃったわね。ちゃんと洗濯しなさいよ」

その言葉に壮介と洋は笑顔を見せ、店の出口へ向おうとする。

「あ、そうそう」

その時、冴子が洋の肩を叩く。

「私がこの仕事をしている理由だったたね。それはね」

冴子は洋の耳元へ近付く。

「私も訳ありでね、高校卒業してすぐこの仕事始めたの。この仕事以外したことないの。だから私には、この仕事しかないのよ」

そう言つと、冴子は博の頬に軽くキスをした。

そして壮介は、頬にキスマークをつけ硬直してしまった洋の身体

を抱え、喫茶店を後にした。

第六章 別れた理由

—

夜、興橋の歓楽街。

美しく光る月も星も薄汚れたビルに遮られた街、その中で一人の男が下を向いて歩いていた。

男の瞳に映るのは、行き交う人の足とタバコの吸殻、そして踏み付けられた蛾やゴキブリの潰れた死骸。

時折キヤバクラのキャッチらしき若い男性がその男に声をかけてくるが、その男は声に見向きもせず歩き続ける。相手にされなかったキャッチの若い男性が後方で捨て台詞を吐いても、振り向くことはなかった。

男は興橋の歓楽街を歩き続ける。ただ男の足取りは、しっかりとしたもののように見える。

そしていつしか男は歓楽街を抜け、潮見川の方へと向かっていた。ここまできると薄汚いビルは姿を消す。街のネオンのせいで星は見え辛い、月ははつきりと見えた。

今夜も丸い月が、暗い足元をほのかに照らす……。

男は潮見川のほとりに立つ。夜の闇の中でさえもゴミが浮き、その汚さが判る程の川。

男はほとりにしゃがみ込む。ただ汚い川の水面を見つめる。

その汚い水面を満月が照らす。

そこで何を見つめているのか？ そこに何が見えるのか？

男が見つめるその先……、
そこは数日前、或る寒い日の朝、或る留学生の他殺体が浮いていた場所だった。

「……………」

男の背後に人影。

いつの間にそこにいたのか、いつからそこにいるのか、男には判らなかった。

男がそれに気付いたのは、背後の人物が男の名前を読んだから……。

「……………」

名を呼ばれても、男は動かずに川の方を向いてしゃがんだままだった。

男は川を見つめる。そんな男の背中を、背後の人物は見つめる。
この間二人に会話はない。

しかし、二人には何かが判っている。判っているから、こんな所で出会っているのにも関わらず、一言も言葉を交わそうとしない。
しばらくの沈黙の後、

「……………」

再び背後の人物が名前を呼ぶ。

すると男は首を少しだけ動かし、左眼の視線だけ背後の人物に向ける。

そして、口を開く……。

「殺したのは、お前だろ？」

すると背後の人物は……、

「……………」

何も言わず、首を縦にも横にも振らず、その場を後にした。

二

或る日の夜、

壮介と洋は興橋にほど近い商店街のアーケード内にいた。

この日はとても寒く、アーケード内においてもその寒風が肌に凍みるほどだった。

コートのポケットに手をつ込み白い息を吐く洋と、メモ用紙のような紙と睨めっこしている壮介。

「おい、多分ここだぜ」

壮介たちが行き着いたのは、とあるチェーン系のラーメン屋の前。『たく、お前さんも人がいいというか、物好きというか、なんと言うか……』

寒そうな洋は壮介に呆れた表情を見せる。

「じゃあねえだろ。向こうからは是非会いたいって言ってきたんだら拒む理由はねえだろ」

実はこの日の前日。壮介のケータイ電話にある人物から連絡があった。

その人物とは川奈晶子、亮平の元恋人である。

その川奈晶子から壮介に、話したいことがあるので直接会いたいと申し出があったのだ。

亮平のことを追う壮介にとって、晶子からの面会希望を断る理由はない。そしてお互いのスケジュールを調整した結果、今夜となった。洋はたまたま時間が空いていたため、壮介が連れてきたのだ。

ただ約束した時間が晶子のアルバイトの終了直後ということもあり、二人が晶子のアルバイト先まで迎えに行くこととなり、壮介は電話で晶子のアルバイト先を聞きだしていた。

「あ、あの娘じゃね？」

店内を覗くと、店内にある満席用の待合イスにショートカットの

若い女性が外の様子を窺いながら座っていた。

壮介がその女性と視線を合わせ、軽く会釈をする。すると女性は立ち上がってカバンを肩にかけ、店を出て壮介たちのもとへとやってきた。

「あの、新谷壮介さんですか？」

川奈晶子らしき女性が壮介に訊ねる。壮介は頭を掻きながら再度会釈をする。

「どうも、新谷です。川奈晶子さんですね？」

すると晶子は軽く口元を緩め、礼をする。壮介たちと同年代で、可愛いというより綺麗な顔立ち。

そしてその晶子の視線は壮介の横へ。

「ああ、一応紹介します。こいつは俺のダチで藤田洋っていいいます。一緒に萩田君の行方を追っています」

そう言うつと壮介は洋の脇を晶子に見えないよう小突く。

「ああ、どうも初めまして。萩田君の友達の藤田です」

洋が会釈をすると、晶子は洋の方へ向き直り礼をした。

「ではここでは何ですので、別の場所へ移動してもよろしいですか」

晶子は壮介たちに確認を取り、歩き出す。

向かった先はアルバイト先から五十メートル程離れたところにある終夜営業の喫茶店。晶子・壮介・洋の順番で入店した。

そして入店し席に着こうとした時、

ドカツ

「キャッ」

晶子が向こう側から来たサラリーマン風の男性客とぶつかった。ぶつかった拍子に、晶子は肩にかけていたカバンを床に落としてしまい、中身の一部が床に散乱した。

「すみません、不注意でした。大丈夫ですか？」

サラリーマン風の男性客は申し訳なさそうに頭を下げながら、床に散らばった物を拾う。

「あ、いえいえ。こちらこそすみません。あ、大丈夫ですから」

そして晶子もしやがみ込み、床に散らばった私物を片付ける。
その様子を所在無さ気に見守る壮介と洋。

ただ壮介は散らばった晶子の私物の中で意外な物を発見する。

「へえ、タバコ吸うんだな、あの娘」

そう思いながら壮介は頭を掻き、フロアの奥に席を確保しに動く。
洋も後に続いた。

「失礼しました」

散らばった私物を片付けた晶子がすぐにやってきた。

「いやいや、いいって。とりあえず注文しよっか。俺はブレンドコ
ーヒーね。洋は」

すると洋は「お前と一緒に」と無言で合図を送る。

「では私はエスプレッソをお願いします」

そして全員が注文を終え、五分程でそれぞれの前にカップが並ん
だ。

「さて飲み物もきたことだし、本題に入るとしましうか、川奈さ
ん」

「はい……」

晶子は一度カップに口をつけ、そして眉間に皺を寄せた……。

三

「話したいことってのは、萩田君のことだよね？」

壮介は単刀直入に亮平の名を出す。すると晶子は無言で首を縦に
振った。

「実は昨日、亮平君から連絡があつたんです」

そして晶子は目を伏せながら話し始める。

「私のケータイに着信があつた時は本当にビックリしました。慌て
て出てみたんですけど、向こうからは何も反応がなくて……」

「反応が……ない？」

壮介は身を乗り出す。

「電話はかかってきたが、向こうは何もしやべらず……ってことですか？」

続いて洋が晶子に確認する。

「はい……。こちらから何度も語りかけたんですけど、二分くらいそんなやり取りがあつて、向こうから電話を切られました」

言い終わると晶子はコーヒーに口をつける。その向かい側に座る壮介は頭を掻く。

「結局、無言電話で終わったということですか」

洋は今聴いた話を簡単に纏め、コーヒーを啜る。その瞬間、洋のメガネが曇る。

「電話中、本当に何もしやべらなかったんですか？ 何か気付いたことは？」

壮介は頭を掻きながら晶子に訊ねる。

「そうですね……。向こうからは確かに何も……。ただ、繁華街にいるみたいで、周りはとても騒がしかったです」

「ということは、街ん中で電話をかけてきたってわけか」

洋はそう言い壮介の方を見る。壮介は右手で頭を抱え、何かを考え込んでいる様子だった。

「おい、壮介！」

あまりにその状態で動かないので、洋は壮介の肩を小突く。

「え、いやいや。スマン……」

その姿を見た晶子は口元を少し緩め、ゆっくり首を振った。

「確証はないけど、萩田君はまだこの辺に潜んでいるんじゃないかな？」

壮介は苦笑いを浮かべた後、洋に向けて話す。

「んー。そんな気がするよな。俺もよく判らないけれど……」

洋は眉間に皺を作る。それはまさにフィーリングであった。

「しかし、何でまた川奈さんに電話を……」

壮介はその点に引つかかった。

姿をくramした萩田亮平と川奈晶子の関係は、「元」恋人同士。

何故今更前のカノジヨに連絡などしてきたのだろうか？

「それは、私にもよく判りません……」

晶子は表情を曇らせる。

「そもそも何で川奈さんは萩田君の行方を捜しているんですか？」

洋がコーヒーを飲みほしてから訊ねる。すると晶子の表情がさらに曇る。

「私はただ心配なだけで、特別捜しているというわけでは……ないんです」

洋の問いに答える晶子。しかしその齒切れは悪い。

その様子を見た壮介は頭を掻き、そして訊ねる。

「少し、聞き難い質問をしていいですか？」

少しの間の後、晶子は頷く。これから何を訊ねられるのか、晶子には判っているようだった。

「どうして別れたんですか、萩田君と」

その質問をした次の瞬間、洋が壮介の脇を小突くが、壮介は洋の脇を小突き返す。

その後、しばらくの沈黙が流れる。

「言い難いなら、無理に言わなくてもいい」

そう壮介が言おうとした時、晶子は口を開く。

「最初は、些細なケンカでした」

心の奥底に閉まっていた思い出を、少しずつ傷がつかないよう紐解いていくかのように、晶子はポツリ・ポツリと話す。

「付き合い始めてから丁度一年。それまで小さなケンカは何度かありました。ずっと一緒にいました。私も、亮平君のことが大好きでした」

壮介は洋に視線を合わせる。二人はその視線で会話をし、そして晶子の方と見る。

晶子は両手でコーヒークップを包み込んで話す。

「あの日、私たちはまた些細なことでケンカをしました。その時は感情的になっていましたが、そのうち頭も冷えてきて、また明日も

いつものように会えると、そう思っていました」

そして晶子は両手でカップを持ち、口を付ける。中身を全部飲みほし、それをテーブルに置いた。

「でも、その日を境に、私たちは疎遠になってしまいました。私には理由が判りませんでした。だってあんなケンカ、いつものことだから。いつもみたいにすぐ仲直りできると思っていたのに……」

飲みほしたコーヒークップ、それはまだ晶子の両手の中にあった。カップはカタカタと小刻みに音を立てていた。

「そして丁度一月前、亮平君の方から「別れよう」って、連絡がありました。理由を聞いても、答えてくれませんでした」

ここで晶子は大きなため息をつき、目を伏せる。泣いているのか……それは壮介たちの位置からでは判断できなかった。

「そ、そうですか……、理由は判らないと」

壮介はガリガリと頭を掻き毟る。洋はフケかかからないように身をくねらせる。

「しかし、そんな話を何で俺たちに？」

洋が自分の疑問をぶつける。

「それは、一緒に亮平君を捜してほしいからなんです」

晶子の瞳が二人を捉える。ここで二人は晶子の目に涙が滲んできたことを知る。

「私は亮平君が殺人を犯すような人だとは思えません。早く亮平君を捜し出して、その無事を確認したい。そして……」

「何で別れを切り出したのかを、聞きたいですか？」

壮介が晶子の言葉を代弁する。すると晶子は無言で頷いた。

壮介は苦笑いを浮かべ頭を掻く。

「判りましたよ。俺たちも亮平の潔白を信じている。一緒に萩田君を捜しましょう！」

そう言つと壮介は右手を晶子に差し出した。

最初キョトンとしていた晶子だったが、その右手の意味を理解し、晶子も右手を差し出す。

そしてお互いの手を握る。

「ほら、洋も！」

壮介が促すと、洋はため息をついたあと右手を出し、二人の手の上に右手を置いた。

「頑張ろうぜ」

壮介がそう言うのと、晶子は涙目ながら笑顔で頷いた。

そして三人は手を戻す。

「新谷さん、藤田さん、ありがとうございます」

晶子は備え付けのナプキンで目尻を拭く。口元は緩み、緊張が一気に解れた様子だった。

「あ、あの、一本吸ってもよろしいですか？」

緊張が解れたためか、晶子はカバンからタバコを取り出す。

「え、ああどうぞ遠慮なく」

洋は自分の近くにあった灰皿を晶子の元へ差し出す。

「あ、すみません」

そして晶子はタバコに火をつける。

その後しばらく三人は談笑する。学校のことやアルバイトのこと等他愛もないことを。

そして晶子は八割程吸いきったタバコを灰皿に押し付けて立ち上がる。

「今日はどうもありがとうございました。また何かありましたらよろしく願います」

晶子は壮介と洋に礼をする。

「いやいやこちらこそ。何か判ったことがあったら連絡してください。こっちからもするから」

そして壮介たちは店の前で晶子と別れる。晶子は何度も振り返り手を振った。

「ええ娘やの」

壮介はしみじみ言う。

「そうやの。タバコさえ吸わんかったらな」

洋もしみじみ答える。

そして二人はアーケード出て駅へと向かう。

「じゃあ俺はここで、お疲れさん」

洋はそう言い残し、駅へと消えていった。洋が改札を通ったのを確認し、壮介は駅前を離れた。壮介はこれから自転車で帰る。

駐輪場への道程、壮介は空を見上げる。

そこにはかすかに輝くオリオン座と煌々と輝く満月があった。

第七章 追跡

—

「そういえば……」

自転車で自宅アパートへと帰る道の途中、壮介は歩道で立ち止まり、右側を向く。

そこには潮見川沿いへと抜ける道があった。

「まだ事件現場って見てなかったよな。ちよつと行ってみるか、寒いけど」

壮介は自転車の前輪を右へと向け、潮見川へと降りる細い道へと入っていく。そこは外灯もなく真つ暗な道。自転車のライトだけが頼りだった。

一分程走ると、すぐに潮見川沿いの道へと出る。夜でも月明かりの下、無数のゴミが浮いているのが判る汚れた川。

汚れた水面、満月の明りは差し込んでその姿は映し出されていない。

「相変わらず、きつたねえ川」

壮介は自転車から降り、手で押しながら道を歩く。

「確か前にTVで見た時はこの辺りだったような」

壮介は歩きながらリンの遺体発見現場を捜す。

そしてしばらく川沿いの道を歩いていると、或る場所で壮介は立ち止まる。

壮介の視線の先、そこに花束と缶ジュースがそれぞれ一つ置かれていた。

「ここです……か」

壮介は自転車を止め、その場所に近寄り、前でしゃがみ込む。そして目を閉じ、手を合わせた。

「さて……と」

壮介は立ち上がり、目の前を流れる汚れた川を眺める。壮介の目に映るのは漆黒の水面とそこに浮かぶ無数のゴミ。

リンは、或る寒い日の朝、ここに浮かんでいたのだ。この無数に浮かぶゴミのように……。

「こりゃ、浮かばねえよな」

壮介はそう呟き、こめかみをポリポリと掻いた。

「しかし……」

壮介は身を乗り出して、水面を凝視する。

「蛍光色のゴミなんかは判るけど、それ以外のモノって結構見難いな。夜じゃここに人が浮いていても気付かないかもな」

壮介はリンがいつ川へ遺棄されたのかを考えていた。発見される直前なのか？ それとも夜のうちに川へ投げ込まれていたのか？

壮介は後ろを振り返る。

そこにはフェンスがあり、そのフェンスは一メートル半程のコンクリート製土台の上にあった。フェンスの向こう側には道路が走っているため、車からの不法投棄防止用の防壁となっていた。

「川沿いの道、丁度この部分だけ向こう側から死角になるわけね」

壮介はフェンスへと近付き、その高さを確認する。

「ってことは、夜のうちにここから遺棄しても、周囲には気付かれ難いってわけか」

壮介は周囲を見渡す。フェンスの向こう側は道路であり、また雑居ビルも建っているため周りからその様子を確認し辛くはなかった。

壮介は再び川の方へと近付き、花束の前でしゃがみ込む。

「この花、まだ新しいな。誰が置いていったんだろう」

壮介は考えながら頭を掻く。リンは最近台湾から来た留学生であり、交友関係は限られる。同じ学校の学生、フラワーの従業員、

そして、萩田亮平。

壮介もその名前を頭に思い描いたのであろうか、ガリガリと髪の毛を掻き毟った。

「一体どこへ行っちゃったんだよ、萩田君……」

壮介はポツリと呟く。

事件発覚直後に比べればその注目度は静まってきたものの、今でもTVのワイドショーではこの事件は連日取り上げられていた。

そして萩田の名前こそ出てはいないものの、リンの交友関係について重要な鍵を握る人物がいると報道されている。

コメンテーターの無責任なコメントを鵜呑みにすれば、まるでその「重要な鍵を握る人物」が犯人かのような印象を持ってしまうかねないものでもあった。

「……………」

壮介は内心動揺していた。壮介や洋は萩田亮平がそのようなことをするような人物とはまるで思っていない。しかし連日連夜の報道により、その信念を外堀から埋められている感じがするのだ。ましてやその本人は姿をくらましている。壮介は自分の思いとは別の方向に事が進んでいこうとしていることに、焦りそして苛立ちを覚えていた。

殺人・死体遺棄容疑で逮捕される亮平の姿など、想像もしたくないであろう……。

「あゝっ、ちつくしょう！」

壮介は立ち上がりワシャワシャと両手で髪の毛を掻き毟った。

焦りと苛立ち……。

壮介はいつになく動揺。

そんな姿を、満月は無表情に照らし続けていた。

二

「誰？」

壮介の背後から女性の声。振り向くと、そこには手に缶コーヒー

を持った仁藤冴子の姿があった。

「ああ、冴子さん」

「あら、アンタは……」

壮介は冴子の方へ向き直る。そして髪の毛をポリポリと掻く。

「どうして、アンタがここに？」

冴子は訝しげな表情で壮介を見る。すると壮介は苦笑いを浮かべ、さらに頭を掻く。

「い、いやあ、ははは。調査ですよ、調査」

壮介の答えに、冴子はさらに顔をしかめる。しかしその表情から警戒心というものはなく、持っていた缶コーヒーを両手に抱え、壮介の方へと近寄っていった。

「ああ、ボタンちゃんの……。まだ頑張ってたんだ」

冴子はクスクスと笑う。笑う度に口から白い息が漏れる。

「今夜も冷えるわね」

冴子はその言いながら花束の置かれている所の前でしゃがみ込む。

「ほらボタンちゃん、温かいコーヒーだよ……」

そして冴子は両手で持っていた缶コーヒーをそつと置いた。

その横に壮介もしゃがみ込む。

「この花束とかは冴子さんが？」

すると冴子は少し意外そうな表情になり首を振る。

「私じゃないわ。何度かここには来たことあるけど、モノを持ってきたのは今日が初めてよ。いつもキレイな花束置いてあるけれど、アンタたちじゃなかったの？」

壮介も首を振る。

「いいえ、俺は何も……。そうか、じゃあ全く別の人がこれを置いたのか。一体誰が……」

壮介がそう言いながら頭を掻いていると、冴子は立ち上がった。

「ここに座ったままじゃ寒いわよ」

冴子は壮介に向けて手を差し伸べる。それに気付いた壮介は苦笑いしながら、その手を握らずに立ち上がった。

「冴子さんはどうしてこんな時間に？」

すると冴子は笑いながら或る雑居ビルを指差した。

「あのビルは確か、キューピットが入っているビルですね」

壮介は場所を確認し、そこがキューピットの場所であることを思い出した。

「そ、粘ってみたんだけどねえ、寒いからお客が来なくてね。あ、ここに来たのはほんの気まぐれ。お店を出た時、ふとボタンちゃんのこと思い出したから」

冴子はそう言って笑ってみせる。しかしその表情にはどこか淋しさを滲ませていた。それがキューピットでお茶を挽いていたことなのか、リンのことを思い出してのことなのか、壮介には思い計れなかった。

「ああ、そういえば……」

その時冴子が無かを思い出し、壮介の肩をポンと叩く。

「この間キューピットで、前のアンタたちみたいにボタンちゃんのことを訊ねてくる男がいたのよ。あんまりしつこいし、何か小汚い格好だったから、適当にあしらっちゃったんだけどね」

その言葉に壮介は敏感に反応する。

「え、その男ってどんなカンジでした」

壮介の意外な喰い付き様に、冴子は少し驚く。

「えっと、だから何か小汚い格好してたわ、無精髭で……。年齢は、アンタと大して変わんないんじゃないかしら」

「名前は……聞いてないですよね？」

壮介の自身のない問いに、冴子は首と手を同時に振る。

「あ、そうだ」

何かを思いついた壮介は、ケータイを取り出す。

「冴子さん、その男って、こんな奴じゃなかったですか？」

壮介は自分のケータイのディスプレイを冴子に見せる。

「これは……」

壮介が冴子に見せたのは、ケータイのカメラで撮影された画像。

それはゼミの飲み会で撮影されたもので、そこに映っていた人物は戸山教授を中心に壮介と洋、そして亮平であった。

「この一番右に映っている男です。どうです？」

冴子は壮介からケータイを受け取り、画像を凝視する。

そして……

「断言はできないけれど、似てるわね……」

ひとしきり画像を見た後、ケータイを壮介に返す。

「そうだ！ あとね、これもこの間の話なんだけれど、今日みたいにこの場所に来ただけだけど、いたのよそいつが」

冴子は再び花束の前にしゃがみ込む。

「こういうカンジで座ってた。後姿だからちゃんと顔は見えないんだけど、多分キューピットで会った男と一緒によ」

それを聞いた壮介は頭をガリガリと掻く。それがもし亮平だったなら……と考えているのだろうか。

「その男、何か言ったりとかしましたか？」

すると冴子は少し考え込む。

「うん、何かボソボソ言ってたんだけど、声が小さくて聞き取れなかった。んで、何か怖くなって、すぐこの場を離れちゃった」

冴子はそう言い立ち上がり、歩き出す。

「寒い。私そろそろ行くわ」

冴子はポケットからタバコを取り出して火をつける。

「あ、はい。気をつけて。俺をそろそろ帰ります」

壮介は花束の前を離れ自転車の方へ。

「そっちこそ。調査頑張ってね。何か私に聞きたいことがあったら、キューピットか前に行った喫茶店覗いてみて。大体どっちかにいるから」

冴子はそう言い残し手を振りながらその場を後にした。

そしてその後姿を見送った後、壮介も自転車に跨りその場を後にした。

「うゝ寒い寒い……」

青白く光る月夜、壮介は白い息を吐きながら自転車漕ぐ。

その間、壮介はずっとあることを考えていた。

殺されたリンのこと。いなくなってしまった亮平のこと。事件現場に置かれていた花束のこと。

或る寒い日の朝、リンの遺体が発見され、そして亮平が姿を消してから謎が謎を呼んでいた。壮介にとってすれば、一つの謎を紐解いていこうとすれば、また新たな謎がそこから出てくる、まるでロシアの土産物のようだった。

「しかし、どこ行っちゃったんだよ」

そして何より気にかけていたのは、亮平の安否だった。

姿を消して以来、まるで連絡が取れない。大学には来なくなり、ケータイ電話は電源が切られているし、自宅アパートにも行ったがポストに郵便物が溜まった状態で帰った形跡はない。煙のように消えてしまった。

しかし冴子の話しよれば、亮平らしき人物が事件現場いた。もしそれが亮平ならば、とりあえずこの近くにいることだけは確かということになる。

そしてそれは壮介も確証はないものの信じて疑わなかった。

「アイツは遠くへ逃げちまうヤツじゃない。きっと……」

きつと、アイツも事件の謎をアイツなりに追っているんだ……。

壮介はそう思っていた。

目の前の信号が赤に変わったので、壮介は自転車を停める。

その時、ピュウと冷たい風が壮介の身体に吹き付ける。

「ひゝ。さみい」

壮介は空を見上げる。走り出してから二十分程。もう繁華街を抜け出し幹線道路から脇に入ったので、周りに高い建物やネオンが少なくなり地上からでも空が広く見渡せる。

そこにはオリオン座とそれ以外の星座、そして満月が青白く輝いている。

壮介は手袋ごしに頭を搔く。

「アイツもこの満月見ているのかな？」

壮介はそう呟く。

この満月の下、同じようにこの街にいるであろう亮平の姿を思い出す。今の壮介にとって、間違いなく一番再会したい人物であった。この同じ街にいるはずなのに会えず、また捜しようもないことに壮介はある種の歯がゆさを感じていた。

壮介はもう一度頭を搔く。

この事件に足をつ突っ込んでしまった以上、壮介はその結末を見るまで後には引けない。

始まりはいつもちよつとした好奇心。

そしてそれを追い求めるあまりに、結果誰も行き着けなかった深みにまで辿り着いてしまう。

そうやって壮介は今まで数々の難問・難事件を解決してきたのだ。「まずはアイツの尻尾を掴まなくちゃな」

壮介が今やるべきこと。それは亮平を捜し出し、再会することだと認識していた。

「明日また洋と相談しなきゃな」

そう言つて、壮介は自転車のペダルに足をかける。

そして目の前の信号が青となり、壮介の自転車は再び走り始める。

「うゝ、カゼひきそうだ……」

笑いながら壮介は寒風の中疾走する。

「待つてる萩田亮平！ 絶対捜し出してやるからなゝ！」

壮介は夜中に近所迷惑ながらも、上空で青く光る満月に向かってそう叫んだ。

第八章 タイムリミット

—

「おい、またいるぜ」

ゼミ終了後、カバンを手に取り講義室を出ようとした壮介に洋が声をかける。

扉の向こうには、あの二人の刑事が立っていた。そして二人は壮介と洋のことを見ていた。

その姿を見た壮介は露骨に顔をしかめる。それは洋も同じで眉間に皺を寄せていた。

「おいお前さんは、どうするよ？」

洋は壮介に近寄り耳打ちをする。

「ドアの真ん前で待たれてたんじゃ、逃げようがねえだろ。ここは突っ込んでいくしかないでしょ」

壮介は頭を掻きながら洋に耳打ち。

「お前さんもか。俺も不本意ながら同じ意見だよ」

そして二人は同時に刑事たちの方へ振り向き、視線を合わせた。すると刑事の一人が講義室の中へ入ろうとする。

「待て」

しかし壮介はこの刑事たちをゼミが行われていた講義室へは一步たりとも踏み込ませたくなかった。壮介は大腿で出入り口へと向かい、刑事の行く手を遮った。

「どうせ俺たちに話があるんだろ？ 外で聞くよ」

壮介は刑事を睨み付ける。その後ろで洋がメガネを光らせていた。すると刑事の一人が挑発的な笑顔を見せる。

「だったら、話が早い」

そして刑事は壮介たちの前から退き、道をあけた。

壮介たちは食堂へと場所を移す。昼時は学生や大学職員でごったがえすこの食堂も、午後四時を過ぎれば人影はまばらになる。壮介たちはその食堂の隅のテーブルへと移動。壮介と洋は並んで座り、その対面に刑事二人が座った。

刑事二人と向き合った壮介と洋は終始固い表情。共に眉間には皺が寄っていた。逆に刑事二人は落ち着いた姿勢。その姿はまるで二人の学生を見下しているようにも見えた。

「さて、本題に入ると致しますか」

刑事の一人が切り出す。すると壮介は大きなため息をつき、頭をガリガリと掻く。

「こつちとしては、答えは変わんないですよ。いいかげんしつこいですよ」

すると刑事はニヤニヤと笑う。

「まあそう言うな。こつちとしては新たに聞きたいことがあるもんでね」

すると刑事は胸ポケットから一枚の写真を取り出し、テーブルに置いた。

「まず、この男に見覚えはあるかな？」

そしてその写真を壮介たちの前へ突き出す。

「この男……？」

意外な切り出し方に少々驚きながらも、壮介たちはその写真に注目した。

そこに写っていたのは、パンチパーマにいかつい顔をした中年男性。凡そ知的なカンジはしない。

しかしその写真の男を見た瞬間、壮介には「ある男」が思い浮かんでいた。思わず洋の方を見ると、洋も壮介と同じようであった。

「知っているみたいだな」

二人の返事を待たずに、刑事が話す。

「この男は嵯峨野栄太といってな、殺害されたリンの働いていたエ

ステ店の店長だ」

そして刑事は壮介たちの前から写真を引き戻し、胸ポケットにしまう。

「それが、何か？ よく判らないですが……」

洋が丁寧な口調で訊ね、一瞬壮介と視線を合わせる。二人は嵯峨野については冴子からある程度のことは聞いている。しかしその件について、ここは一旦黙っておくことにした。

「我々の捜査で、この男が殺害されたリンについて、他のエステ嬢にくらべ随分入れ込んでいたようだな、特別な関係だった可能性が高い」

刑事はテーブルに両肘をついて話す。

「それでだ、我々はこの男から近く事情を聞こうと考えているわけだが、今はそれ以上のことしか判らない」

すると壮介は再び大きなため息をつき頭を掻く。

「つまり、俺たちにこの嵯峨野という男について、何か知っていることを話せというわけですか？」

壮介が言い終わると、刑事は笑顔で頷いた。しかしその笑顔は決して二人に対して友好的なものではない。

「さすがは大学生、そこらのチンピラや酔っ払いと違って話が早い」その言葉を聞いて、遂に洋も大きなため息をつく。そして壮介は頭をガリガリと掻いた後、その手をヒラヒラさせた。

「俺たちが警察の知っている以上のことを知っているわけがないでしょう」

すると刑事二人の表情が一変に曇る。

「確かにその嵯峨野という写真の男を見たことはあります。しかしその姿形以上のことは何も知りませんよ」

壮介の言葉に洋も同調して頷く。

「俺も同じですよ、刑事さん」

すると刑事の一人が表情を強張らせテーブルに乗り出してこようとしたが、もう一人がそれを制止する。

「そうか……、本当に何も知らないんだな」

その言葉に壮介たちは同時に首を縦に振る。

「……判った」

刑事たちの表情は明らかに疑いの目を二人に向けていたが、ここは引き下がった。

「話は終わりですか？」

壮介は頭を掻きながら訊ねる。洋は横で背伸びをする。

「まあ……そうだな。では我々はこれで失礼するよ」

そして刑事二人は席を立つ。それを見た壮介たちも席を立った。

「ああ、そういえば」

去り際、刑事の一人が何かを思い出したかのように振り返る。

「萩田亮平についてだが、依然行方は判らずかな？」

亮平の名前に緊張を解きかけていた壮介たちの表情が一瞬に強張る。

「実はね、警察としても重要参考人をこれ以上行方知れずのまましておけなくてね、週明けにも公開捜査に踏み切ろうと考えているんだ」

公開捜査の言葉に洋が敏感に反応する。

「それはどういうことですか？」

洋は動揺し、そのメガネが揺れる。

「萩田亮平の名前と顔写真を公開するということだ」

刑事の一人が冷たく言い放つ。

「まあこれで目撃情報が多数寄せられ、すぐ萩田亮平を発見するところができるだろう。君たちにとってもメリットはあるんじゃないかな？ フッフッフ」

刑事はそんな皮肉混じりの含み笑いを残し、食堂から消えていった。

そして閑散とした食堂に残された二人は、ただ立ち尽くす。

「名前と顔写真公開だって……？」

洋は眉間に皺を寄せ、口を震わせる。そして壮介は頭をガリガリ

と掻き筆る。

「まずいな。ただでさえ暗に容疑者扱いされているのに、名前と写真を公開されたら……」

「ヘタしたら、停学あるいは……、退学処分」

二人は最悪のケースを考える。TVのワイドショーでは実名こそ出ていないものの、亮平は重要な鍵を握る人物として扱われ、番組によっては犯人扱いされている。そこに名前と顔写真がつけば、「萩田亮平は殺人犯」というレッテルが、真相を抜きにしてもイメージのみで張られてしまう可能性が高い。

「週明けか……。今日が金曜だから、あと二日か……」

壮介は頭を掻きながら話す。

「それまでに萩田君を見つけ出さないと、本当に厄介なことになるぞ」

洋はとうとうメガネを外し、目頭をギュツと押さえる。

タイムリミットはあと二日。

それが萩田亮平を捜すために、二人に残された時間であった。

二

週明けに亮平の実名と顔写真が全国に公開。

そのタイムリミットまで、あと二日。

そんな日の夜。壮介と洋はリンの遺体発見現場にいた。この日は曇っていたため月は出ておらず、普段よりも辺りは暗かった。そんな中、二人は寒さに身を縮めながらその場所に佇んでいた。

「今日は一段と冷えるわ……」

洋の吐く息はいつもに増して白く、メガネまで曇ってしまいそうな勢い。

「なあ洋、これどう思う？」

壮介も白い息を吐きながら、洋に訊ねる。壮介たちの足元にはあ

の花束があつた。

花束はここに置かれてからもう日が経っているのか、所々痛み萎れていた。

「前にここで冴子さんにあつた時、ここには度々花束が置かれているらしい。それも誰が置いているのか判らない」

洋はその花束を手にとつて見る。持ち上げると花びらの数枚が地面へと落ちる。

「お前さんは、この花束を一体誰が持ってきているのか、気になっているわけね」

洋は花束を壮介のほうに向ける。壮介はその花束を受け取り、そして元にあつた場所へと戻す。

「わざわざ花束を交換しにきているわけだから、殺されたリンとは相当深い関係にあつた人物が持ってきている可能性が高いんだ」

「それが、もしや萩田君だと……？」

洋がここへやってきた核心へと触れる。

すると壮介は頭を掻きながら二やりと笑つ。

「お前も判つてゐるクセに」

そして洋の肩をポンと小突く。

「まあな。でも確証はあるのか？　いつ現れるかも判らないし、当然これを萩田君がやっているのかも……」

すると壮介は頭をガリガリ掻き、表情を曇らせる。

「確かに。この花の萎れ具合から考えて、そろそろ花を交換にくるんじゃないかなって予想しかないのが現状だよ」

しかし壮介の瞳はギラついていた。

「でも俺たちが今できることは、これくらいしかない。泣いても笑つても、週明けには萩田君の名前と顔写真が公開される。それまで指くわえて見てるなんて、俺にはできない。確証はないけれど、できるだけのことを俺はやりたいんだ」

壮介は熱く語り、握り拳を作ってみせる。それを見た洋は笑顔で壮介の肩を小突く。

「全く、お前には散々バカ負けするよ。寒い中、それに付き合う俺もバカだな」

洋がクククと笑うと壮介も同じように笑う。あの時、壮介がどんな行動を取るかは洋には大体想像がついていた。そして壮介も、洋が自分にとことん付き合ってくれるとも信じていた。そんな二人の思いがこの笑いに表れていた。

「さて、でもどうするよ。まさかこの寒い中で延々ここに突っ立つてろと？」

洋は壮介に訊ねる。すると壮介は苦笑いを浮かべながら頭をポリポリと搔く。

「お、おい、そのまさかかよ……」

洋は呆れた表情を見せる。まさかそこまでの考えがなかったとは思っていなかったたのであろう。

「じゃあねえだろ。ここは道路側からは丁度死角になるんだから、この辺りで待っているしかないよ」

すると洋は両手を振る。

「おいおい、そりゃ勘弁だぜ。明日からこの冬一番の冷え込みって天気予報で言ってたのにさ、こんな所に連日突っ立ってたらマジで凍え死ぬぜ」

洋は真剣な表情で壮介に訴える。すると壮介は困った表情を見せる。

「確かにそうだけれど、でもじゃあどこでこの場所を見張ればいいんだよ」

壮介は困り果て頭を搔く。

「どっかい場所はないのかね？」

洋は辺りを見渡す。この場所は高いフェンスに囲まれており、道路側からは完全な死角となる。

「どっか近くの建物の中から見る事ができれば……」

洋は辺りのビルを見渡す。どれもこれも汚い雑居ビルだ。

「あ、そういえば……」

壮介が何かを思い出した。

「確かあのビルは……、洋、行ってみよう」

壮介は近くの側道から道路側へと抜ける。そして壮介はあるビルの前にと立つ。

ビルの前に来て、洋もピンときたようだ。

「なるほど、ここからあの場所がみえるわけか」

そして壮介も頷いた。

壮介たちが来た雑居ビル。その四階のテナントにはキューピットが入っていた。

三

壮介と洋はキューピットへ入ると、早々に入店料を支払い男性用スペースへ。幸い男性スペースに客はいなかったので、窓側の席を確保することができた。

キューピットの窓にはブラインドが下ろされているが、二人はこっそりそのブラインドをある程度まで上げる。そこから丁度花束のある場所を見渡すことができた。

「さて、温かい場所を確保できましたぞ。いつでも来いつてんだ」

洋は拳をパキパキと鳴らす。壮介は既にブラインドの隙間に顔を張り付かせている。

「ここが入店料払えば時間無制限でいれる所でホント良かったよ。時間制だったら金もたねえよ」

壮介とは反対に洋は窓には近付かず、席に座りリラックスしている。

「とりあえずここは俺が見てるから、お前は店員がこっちに来たらフォロー頼むわ」

壮介は外の方を見ながら洋に話す。その後ろで洋はOKのサインを出した。

「幸い女性客もいないみたいだ。しばらくは大丈夫だろ」

洋はスペースに設置されてあるモニターを見る。そこには無人の女性スペースが映し出されていた。

そして洋はイスを持ち上げ、壮介の背後に移動させる。

「お前の背後は俺に任せろってか？」

洋は笑いながら話す。それを聞いた壮介も外を見ながらプツと吹き出す。

「じゃ、任せたぞ。俺はこっち担当だ」

壮介は外の光景に食い入る。月が出ていないためか外はかなり暗かったが、そこに何があるかや人影等ははっきりと確認できる。壮介は全神経を集中させて外を見る。

「いつでも、来い！」

どうしても亮平と会いたい壮介。今日ここに現れる確証などない。もつと言えば、タイムリミットである月曜までに発見できる確証すらない。でも壮介は精一杯心で念じる。

そして時間は流れる。一時間、二時間、三時間……と刻一刻と時間は過ぎていく。

時刻が午後十一時に近付いてきた時、

「あの、お客さん……」

店長の江嶋が男性スペースへとやってきた。その声思わず壮介も振り向く。

「そろそろ閉店時間ですので……」

江嶋はそれだけ告げると奥へとすっこんでいった。

「そろそろ時間だ……」

洋が壮介に告げる。壮介は洋の方を向いて頭を掻く。

「ああ、今日はおしまいだな」

「また明日だな……。頑張ろうぜ」

壮介は残念そうな表情でため息をつく。そして最後に窓の方へと振り向き、上げていたブラインドを下ろす。

その時だった！

「あっ！ ひ、人だ！」

壮介はブラインドを下ろすのをやめ、立ち上がり店を飛び出す。

「あ、お、おい、壮介！」

突然の行動に驚いた洋は慌てて後を追う。

「ありがとうございました！」

洋が出て行こうとした時、受付の奥から江嶋の棒読みな挨拶が聞こえた。

寒空の下、コートの前も閉じずに壮介は走る。その吐く白い息は機関車の蒸気のように後ろへと流れていく。

壮介はあの場所へ向かい、ひたすら走る、走る、走る……。

そして川沿いの道へと出た。

そこには……。

「はあ、はあ……」

壮介の立っている場所から五十メートル程先、花束が置かれていた場所の前に、ぽつんと人影が一つ佇んでいた。

人影は何かを持っている。壮介の位置からではそれが何なのかは判らない。

壮介は息を整え、ゆっくりと近づく。人影の方は壮介の存在にまだ気が付いていない様子だった。

壮介はゆっくりと近づく、近づく、近づく……。

そして人影の顔の輪郭が判る距離にまで来た時、壮介の足が停まる。

ここで壮介は無言で頭をガリガリと掻き篦る。壮介の中で、何かが確信へと変わった。

まず人影が持っているもの。それは花束であった。

そして人影が誰なのか？ それは壮介の知っている人物であり……

…、

壮介が今一番会いたいと願っている人物であった。

壮介は高鳴る鼓動を押さえ、息を整える。そして、その名を口に

する。

「萩田君……」

すると人影がぴくつと動き、壮介の方へと振り向く。

「……………」

その時、冷たい風が二人の間をびゅうと吹き抜ける。

「萩田君、やっと、やっと……会えた」

壮介は緊張が緩み、笑みがこぼれる。対して亮平は微動だにしない。

「し、んた……に……」

亮平は魔女のようなしわがれた声で壮介の名を呼ぶ。

その時、亮平は花束を置くと踵を返し、その場から立ち去ろうとする。

「は、萩田君！」

壮介は後を追おうとする。

しかし、それは不要であった。

「こちとら寒空の下散々な目にあってんだ。簡単には逃がさないぜ、萩田君！」

亮平の行く手には、白い息を荒く吐き出す洋の姿があった。

「……………」

それに気付いた亮平は顔を伏せる。

「萩田君……」

月も出ない暗い夜、壮介と洋は、遂に萩田亮平と対峙する。

亮平を追おうと駆け出そうとした壮介の足元には、亮平の手によって置かれた花束があった。

第九章 再会

—

もう日付が変わろうかという時刻……、

壮介、洋、そして亮平はお城公園の噴水前にいた。

この日の夜、月は出ていない。しかし噴水前には外灯が豊富に設置されているので灯には不自由しない。

そんな寒風の吹く夜のベンチに、三人はそれぞれ思い思いの缶コーヒーを握り締めて座っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

潮見川からここまで壮介と洋は亮平を挟み込む形でここまで連れてきた。その間三人共無言で、亮平を二人が連行しているようであった。そしてここまで来てベンチに座ってから、まだ誰も何もしゃべってはいない。

亮平は缶コーヒーを握り締め俯いたまま。二人のどちら共と視線を合わせようとはしない。そして壮介たちは何から話そうか必死に話を整理し言葉を選んでいる最中のようなであった。

壮介がぶるつと身震いをする。もう深夜なのでこの公園を寢床にしているホームレス以外、ここを訪れる者はいない。公園は静かで、三人の周りでは風がぴゅうぴゅうと冷たく吹き抜ける音が聞こえていた。

壮介は一度缶コーヒーに口をつけると、それをベンチの隅に置いた。そして缶コーヒーを持っていたことによってやや温くなった手で頭を掻いた。

「あ、あのさ、萩田君……………」

頭を掻いた手を下ろしてから、壮介は遂に口を開いた。

「とりあえず、無事みたいで、よかったよ」

壮介はそんな気分ではなかったが、必死に笑顔を作ってみせる。しかし亮平は俯いたままなので、その笑顔は視線に入っていない。「色々聞きたいことはあるんだ。色々……」

そして壮介は口元を引き締める。そして隅に置いていた缶コーヒーをぐいと飲み干した。

「まず、教えてほしいんだ。萩田君と殺されたリン・エイミとの関係を？ 一体、何があったんだ？」

壮介は亮平の視界に入ろうと必死に食い入る。しかし亮平は視線も顔も首も何一つ動かさない。

「おい、萩田君」

洋も壮介と同じだった。亮平の顔をじっと見つめる。

「俺も壮介も、あの一件以来、萩田君がいなくなってから、ずっとずつと心配して捜してたんだ。壮介はこの寒い中外駆けずり回ったり、得体の知れない奴等に頭下げて話聞かせてもらったり……、ホント大変だったんだよ」

洋は缶コーヒーを一気に飲み干し、亮平の肩を掴む。

「なあ、それもこれも全部、壮介はお前のことが心配でやってきたんだ。なあ、判るだろ？ お前、壮介のダチだろ？ なあ！」

洋は亮平の肩を揺する。興奮のあまり洋のメガネは曇っていた。

そして亮平を揺すった拍子に傍に置いていた缶コーヒーが地面に落ち、カランカランと乾いた音を響かせた。

「よせ、洋」

洋が亮平の方を激しく揺すりはじめたので壮介はそれを制止する。

「……………」

その間も、亮平は終始無言であった。

「萩田君……………」

壮介は頭をガリガリと搔いた。

「なあ、萩田君。俺たちは、萩田君たちを助けたいんだ」

壮介は再び亮平の焦点の定まらない視線を追う。

「このままじゃ萩田君は犯罪者扱い。週明けにも萩田君は実名と顔写真を公開されてしまう。そうなれば最悪大学にも戻れなくなってしまうかもしれないんだ。俺も洋もそんなことにさせたくない。それに……」

今度は壮介が亮平の肩に触れる。しかしそれはとても優しいもの。「死んでしまったリンさんのためにも、俺はこの事件の真相を導き出したい。ここまではリンさんは汚名を着せられたまま、死んでもうかばれないよ」

そして壮介はベンチから腰を浮かせ、亮平の正面に回る。

「萩田君、何でもいいから、教えてくれ、答えてくれ。何よりリンさんのために……」

最後に壮介はわずかに口元を緩め、優しく亮平に訴えかけた。

そして……、

亮平の両手が動いた。それに気付いた壮介は亮平の肩から手を放す。

亮平の両手はそのまま上へと移動し、それらは自らの顔を包み込んだ。

「……ああ……」

そしてその手の間から、声とも嗚咽ともれない声が零れた。

「リン……リン………」

亮平は鼻にかかった声で何度もリンの名を呼ぶ。それを聞いた壮介と洋は顔を合わせる。

「萩田君。話してくれるね……」

壮介は優しい口調で亮平に訊ねる。

「………」

亮平の声が止まる。無言だが、二人はそれを「OK」の合図と汲み取った。

「俺はこう考えている」

壮介はベンチに座り直し、亮平に向けて話し始める。

亮平は依然として両手で顔を覆っている。

「萩田君と殺されたリン・エイミは知り合いだった。否、それ以上の親密な関係。例えば……恋人」

壮介はいきなり核心をついてくる。これは壮介がずっと考えていたこと。リン殺害の直後に警察が亮平の元を訪れたこと。そして殺害現場に置かれていた花束は亮平が持ってきていたということを総合すれば、この核心はおのずと導き出される。

「どこでどういう風に知り合って、そういう関係になったかまでは俺には判らない。でもそうなんじゃないかな？ 少なくとも、とても親密な関係だったことは間違いないんじゃないかな？」

壮介は先程のように優しく話しかける。

「……………、壮介……………」

両手で覆われた亮平の顔、その内側で口がかすかに動いた。寒風にかき消されそうな小さな声で、亮平は呟いた。

「萩田君……………」

壮介と洋は同時に亮平の名を呼ぶ。すると亮平は顔を覆っていた両手を静かに下ろした。

この時、二人は久し振りに亮平の表情をまじまじと見た。亮平の顔は少しやつれ、そして目の下にはクマができている。お世辞にも健康的な表情とはいえないものだった。

「壮介、洋…………、今まで心配かけて、すまなかった……………」

亮平は伏せたままの顔をさらに伏せた。そして視線を壮介・洋の方へと動かした。

「壮介、お前の言うとおり、俺とリンは恋人…………だったんだ」

亮平は喉から搾り出すような声で二人に話す。疲労からか、その声はもう擦れてしまっている。

「俺のことを調べていたんなら、前の彼女のことも知っているよね？」

亮平の問いかけに、壮介と洋は深く頷いた。

「きっかけは些細なケンカだった。それがいつまでも俺の中で引きずられていて、結果、別れることになったんだ」

この頃から亮平の声に変化が現れる。その声は擦れながら、次第に震え始める。

「それからしばらく、俺は荒れていた……。それを紛らわすために酒にパチンコに競馬……。果ては前までは全然興味もなかった風俗店にも入り浸るようになった。もう滅茶苦茶だった……」

そして亮平は再び両手で顔を覆い、大きなため息をつく。その姿を壮介と洋は視線を切らずに見つめる。

ここで洋が何か口を挟もうとするが、壮介はそれを無言で制止する。

「そんな時、あの店でリンと出会った。優しくて、優しくて……。ボロボロに落ちぶれちまった俺は、地獄で天使に会った気分だった。俺はそれ以来リンにのめり込み、ずっとリンの元へ通い詰めた。そのうち、リンも俺のことを……」

ここまで言い終わると亮平はフッと再び大きなため息をついた。ここで壮介が口を挟む。

「そして、リンと個人的な交際を始めたというわけ……？」
すると亮平は無言で小さく頷いた。

「お互いの都合で、なかなか会うことはできなかったけれど、会えばとても楽しかった。嬉しかった。とても癒された……。真つ暗な闇に一つの灯がともったような、そんなカンジだった」

亮平は両手で顔を覆った状態で話し続ける。その声は小さく、そして擦れている。

「なのに、なのに……。何で、何でこんなことに……」
項垂れる亮平の姿に壮介は頭を掻く。

「判った、萩田君。ありがとう」

洋はまだ何か言いたそうな様子だったが、壮介は無言でそれをたしなめる。

そして壮介は再び頭をガリガリと掻く。

「あともう一つ聞きたいことがある。いいかな？」

壮介の問いに亮平は無言。壮介はそれを「OK」と解釈した。そしてもう一つの核心に触れる。

「萩田君は、リン・エイミを殺した人物を、知っているね？」

壮介がそれを言い終わった瞬間、亮平はガバツと顔を上げ憔悴した表情で壮介を睨み付けた。

その時、またしてもびゅうと冷たい風が三人の周りを吹き抜けていった。

三

「そ、壮介……」

亮平は壮介の顔をじつと睨む。瞳は潤み、口元はプルプルと震えていたそんな亮平の表情を、壮介は表情を変えずに見つめる。そして洋は壮介の言葉に、豆鉄砲を喰らったような表情をしていた。

「萩田君、もう一度聞くよ。リン・エイミを殺した人物を、知っているね？」

最早亮平はその動揺を隠せないでいる。壮介の言葉により、さらにその口元は震えた。

「そ、壮介。お前何言っただよ？」

壮介と亮平は向かい合って無言のまま。それに洋の言葉が割って入る。

「洋、勿論これは俺の推測だ。何の証拠もない。でも、何かそんな気がするんだ」

「そんな気がするって、お前……」

壮介の言葉に洋は呆れた表情を浮かべる。単なる思い付きや想像の次元の話で、壮介はここまで突拍子もないことを言っただけだ。しかし洋はそんな突拍子もない話を無視することはできなかった。

何故なら、壮介はその突拍子もない推論で、過去に難事件の解決の糸口を導き出してからであった。

「萩田君、どうなんだ？ 君は、知っているのか？」

壮介は亮平に問い詰める。

「……………」

亮平の口元は震えているが、そこから言葉は出てこない。

「萩田君、これはあくまで俺の推測だ。間違っていたら謝る」

壮介は一度頭をガリガリと掻き耑ってから話し始める。

「君が姿を消してしまったのは、参考人の身分である自分に警察の目を向けさせるためなんじゃないかって、俺は思っている。何故そんなことをする必要があるのか？ その理由として一番判りやすいのは、萩田君がリン・エイミを殺した犯人を知っていて、そして……………」

そして壮介の目に力が入る。

「そして、その犯人は、萩田君の知っている人なんじゃないかって……………」

その時だった、

「うわわあああああ！」

突然亮平はベンチから立ち上がり猛然とその場から走り去ってしまった。

「な、な、な……………」

突然のことに洋は呆然としている。しかし壮介は冷静だった。

「待って、萩田君！ 洋、追いかけるぞ！」

言うより早く壮介も走り出していた。

「おい、待って！」

そしてワントンポ遅れて洋も走り出す。

「萩田くん！ 待つんだ！」

壮介は真夜中の公園で亮平の背中を必死に追う。亮平はとんでもないスピードで逃げ去ろうとしている。壮介は亮平の背中を闇の中に見失わないよう、瞬きもせずに追う。

しかし、それも長くは続かず、外灯もない闇に包まれた公園で結局亮平を見失ってしまった。

「あゝ、しまったなあゝ！」

完全に見失ってしまったことを悟った壮介は、息を切らせながら頭をガリガリと掻きまわった。

「おい、壮介、どこだゝ」

遠くで洋の呼ぶ声が聞こえる。壮介はそれに反応し、洋を自分の元へと呼んだ。

「ダメだったのか？」

はあはあと息を切らせながら洋が訊ねる。壮介は無言で首を振った。

「萩田君……」

途方に暮れた壮介は漆黒の空を見上げる。

この日の夜は月が出ておらず、ただただ真っ暗闇であった。

第十章 リン・エイミ

—

「はい、いらつしゃい」

或る日の深夜、フラワーの扉が開いた。そして扉の向こうから現れたのは、一人の青年だった。

「コースの方はどう致しましょう？」

フラワーの店長である嵯峨野はその青年にメニュー表を見せる。

「あの……初めて来たので、よくわからないんですが」

「では説明しますので、どうぞそちらのソファに」

青年は酔っているのか顔が赤く染まっている。そして嵯峨野に促され待合のソファに座る。

「まず三十分五千円のコースは抜きだけのコースとなります。四十分九千八百円のコースはシャワーを浴びて最後まで。六十分一万五千円のコースは後でマッサージがついています」

嵯峨野はほろ酔いの青年にコースを丁寧に説明する。青年は聞いているのか聞いていないのか、無言で相槌をうつている。

「どのコースで、六十分のコースがオススメですけどねえ」

「……………」

しばらくの間があり、そして、

「このコースで」

青年は三十分のコースを指差した。

すると嵯峨野は一瞬表情が曇るもののすぐに笑顔に戻る。

「判りました。では前金で五千円頂戴致します」

そして青年はズボンのポケットから財布を取り出し、五千円札を嵯峨野に渡した。

「では用意をしますので、しばらくお待ちください」
すると嵯峨野は待合室にカーテンを敷き、奥へと消えていった。

三分程経った頃、嵯峨野の呼ぶ声が聞こえた。

「ではお待たせしました。どうぞ」

嵯峨野の呼ぶ声に青年はソファから立ち上がり、嵯峨野の待つ方へ。頭が痛いのかこめかみをコンコンと叩いている。

青年が案内されたのは、受付に向かって左側にある通路の前、掛けられているカーテンを開けて、その奥へと促される。

「ではごゆっくり」

青年はカーテンの向こう側へと入る。通路は狭く、一人一人がやっと通れるくらい。そして照明も暗く、そしてピンク色となる。

「イラっしゃイ」

通路の奥で女性の声がした。青年がそちらの方へ振り向くと、そこにキヤミソール姿の若い女性が笑顔で立っていた。

「あ……」

その女性の存在に気づき、青年はこの女性が自分の相手なのだと認識する。青年は女性の元へと歩いていく。

「どうぞ、こちらへ」

青年が前まで来ると、女性はその手を優しく握り個室へと案内する。個室は大体二畳程度のスペース。ベッドと小さな棚しかない簡単な造り。

「……………」

青年は女性の顔をみる。すると女性はニコツと笑う。

「どうも、はじめまして。ワたし、ボタンといいます」

そう言うと、ボタンは深く会釈をする。青年もつられるかのように会釈を何度もしていた。

「オにいさん、おさけのんでル？」

ボタンはそう言いながら青年の頬を触る。青年はそれにビクツと反応する。そんな姿を見て、ボタンはクスクス笑う。

「ヨつてるネ」

ボタンは笑いながら再び青年の手を握る。青年は恥ずかしそうな表情で苦笑いを浮かべる。

「ちょ、ちよつとね」

青年がそう言うのと、ボタンはまた笑う。

「じゃ、おにいさん、ふくぬいでください」

ボタンはベッドの下からプラスチック製のカゴを取り出す。

「ああ、はい」

そして言われるまま、青年は服を脱ぎだす。

「オにいさん、なまえハ？」

下着のみになったところで、青年はボタンに名前を訊ねられた。青年は恥ずかしそうに答える。

「りよ、亮平……」

「オー、りよーへーネ」

ボタンは青年の名を呼ぶと、青年の身体をギュッと抱きしめた。そして、最後に残った下着をゆっくりと脱がしていった。

二

「ネえ、りよーへー」

或る日の深夜……、

サービスが終わった後、ベッドの上に寝そべる亮平を、ボタンが見つめる。その視線はとても優しいもの。

「りよーへー、わたしにずっとあいにきてくれル。ワたし、うれしいネ」

そしてボタンは寝そべる亮平の唇に自分の唇を重ねる。

「……」

亮平はボタンの身体を抱え、ベッドから起き上がる。その間も唇は重ねたまま。

そしてしばらくして、その唇同士は離れる。

「ボタン、いつもありがとう」

亮平はボタンに向かい、口元を緩め恥ずかしそうな表情を作る。それを見たボタンはクスッと笑い、亮平の隣に腰を掛ける。

「りょーへー」

ボタンは自らの腕を亮平の首へと絡める。

「おい、ボ、ボタン……」

亮平はくすぐったそうに、でも嬉しそうにボタンを再び抱き締める。

「ワたし、りょうへいのわらったかお、すきネ」

そう言い、ボタンは亮平の頬を優しく撫でる。

「さいしょにあったときからいままで、りょうへいはくらいかおしてること、おおかッタ。デモ、いまはわらうこともあるネ」

そしてボタンは両手で亮平の頬に触れる。まるで大事なものを優しく包み込むかのような手つきで。

「ワたし、りょうへいのわらったかお、もっともっとみたい。クらかおなんかも、つまんないネ」

ボタンは亮平の瞳を見据え、ニコリと微笑む。

「ボタン……、ありがとう」

亮平は自分の頬にあてがわれたボタンの手に、自分の手のひらを合わせる。

「りょーへー、なにかつらいことあッタ。ソレ、わかるネ」

二人はお互いの瞳のを見つめる。お互いがお互いの温もりを感じているかのよう。そしてボタンは優しく話す。

「デモ、つらいことあっても、わらえなきゃだめネ。ヒとは、わらえなきゃ、いきていけないネ」

ボタンは亮平に優しく微笑みかける。それにつられるかのように、亮平も微笑む。

「そうだな……。俺が笑顔になれるようになったのは、ボタンのおかげだよ。ありがとう」

するとボタンはさらに笑顔になる。

「ソうネ。もつともつと笑ウ。ソうしたら、りょーへーはもつとしあわせになれるネ」

そう言うとなボタンは亮平の身体をギュッと抱き締める。そして亮平もボタンの身体を抱き締め返す。

しばらく抱き合い、亮平の方から身体を離す。再び見つめ合った二人は笑顔で唇を合わせる。

唇を離れた後、ボタンはウフフと笑いながらベッドから立ち、窓側へ移動しカーテンを開ける。すると部屋を支配するピンク色の照明に外の光が混じりこんでくる。

「ここから、かわがみえル。アんまり、きれいじゃない」

フラワーの入っているビルの傍には潮見川が流れている。ボタンをその水面をガラス越しに指差す。

「デモ、キラキラひかつてるネ」

そしてボタンは視線を上に向ける。

窓の向こうの夜空、そこには煌々と光る満月があった。

ボタンはそんな満月をじっと見つめる。

「キょうも、おつきさまは、きれいなネ」

その言葉に、亮平もベッドから降りて窓側へ。そしてボタンの横に並ぶ。

「ホント、キレイな満月だ」

亮平が窓際に来ると、ボタンはその亮平の肩に自分の身体を預ける。そして亮平もそんなボタンの身体を優しく支える。

「ボタン、月は好きか？」

するとボタンはニコリと笑い、頷く。

「おつきさまは、きれいなネ。わたし、好きネ」

そしてボタンは亮平の手をそつと握る。

「りょーへー……」

亮平もボタンの手を握る。お互いがお互いの手を握り合う……。

「ワたし、ほんとうのなまえ、リンっていう。これから、リンってよんデ……」

そう言つと、ボタン……リンはさらに亮平へ身体を預ける。

「……リン……」

亮平はリンの身体をそつと抱く。

「リン、リン・エイミ……、ワたしの、なまエ……」

そして二人は時間がくるまで、ずっと寄り添つて、夜空に光る満月を見つめていた……。

三

……
星も月も見えない漆黒の闇……、

そんな中に、一人の青年が彷徨っていた。

青年の名前は、萩田亮平。

彼は今、真つ暗な闇の中を重い足取りで歩いていた。

遠くで彼の名を呼ぶ声が聞こえるが、それには全く反応していない。

ただ、ただ真つ暗な闇の中、ぽつ、ぽつと歩いていた。

「リン……、リン・エイミ……」

亮平はうわ言のように、かつて愛した女性の名を呼んでいた。その女性は、もうこの世にはいない。

「……」

亮平の足取りは段々と遅く、重くなっていく。

そして遂に、立ち止まってしまった。

「……リン」

亮平はその場にしゃがみ込む。

「みえない、何も、みえないよ……リン」

亮平は地面に向かって呟く。そこには誰も、何もいない。外灯も

何もなくて、亮平の周りはまさに漆黒の闇である。

「どうして、どうしてお前はいなくなってしまったんだ……」

そこにはいない誰かに話しているわけでもない亮平、その声には果てしない絶望感が滲んでいた。

「もう俺は、あの時みたいに笑えないよ、リン。リン……」

その時、地面にポタツ、ポタツと雫が滴り落ちる。

「俺はこれから、これからどうしたいんだ。こんなんじゃ何も見えない。どこにも行けない。俺は何もできやしないんだ……」

亮平は地面の土を掴む。その手は汚れ、爪の間に黄土色の砂が入り込む。

「リン……お前がいたから、俺は歩いていけた。どんな暗くて怖い所でも、俺は歩いていけた。お前がいなかったら、俺はもう……動けないんだ……」

そして亮平は上空を見上げる。空には何の光もなく、暗闇として周囲と同化していた。

「そうだ、リン。俺にとってお前は、月の光だった。どんな暗闇の中でも、優しく足元を照らしてくれる、月の光のような存在だった。それさえあればどんなに暗くて怖い道でも、前に進んでいけた」

亮平は上空という虚空を見上げ、涙を地面に滴らせる。

「でも今は……そんな月の光さえ、ない。なにも、ないんだ……」
そして亮平は、そのまま蹲ってしまう。

「俺は、俺は……これからどうすればいいんだ……」

愛する者を失った男の悲壮な問い。それに答える者は、誰もいない。

自分の足元を照らす月の光を失った男は、もう動くことすらできなかった。

亮平は失ってしまったのだ。ほんの少し足元を照らしてくれる、リン・エイミという月光を……。

第十一章 悲劇の深層

—

壮介と洋が亮平と再会し、そして再び見失ってしまった夜から三日が経過……。

以前に刑事が公開捜査に乗り出すと言っていた日を迎えることとなった。

「……………」

その日の朝、壮介は目を覚ましてから憂鬱な気持ちで頭をガリガリと掻く。

この三日間、洋と共に亮平の行方を懸命に捜してはみるが、彼はどこにもいなかった。そして遂にタイムリミットを向かえてしまったのである。

壮介は頭を掻きながらベッドを降り、テーブルに置かれたTVのリモコンに手を伸ばす。

「……………」

しかしスイッチをONにしようとはせず、そのまま手から離してしまった。

そして壮介は大きなため息をつき、両手で顔を覆う。

もし今つけたTV画面に、友人の顔と名前が出ていたら……、

壮介はそんなことを考え、TVをつけるのを止めた。

「はあ、どうしたらいいんだ……………」

あの時止めることができなかったこと、そして見つけたすことができなかった悔しさと、全てが終わってしまうことへの怖さが、壮介の気持ちに交錯する。壮介はただただ頭をガリガリと掻きまわった。その時だった、テーブルに置かれていた壮介のケータイのバイブが震えた。

壮介はディスプレイを見る。それは洋からの着信だった。

「もしもし……」

寝起き声で壮介は電話に出る。

『おい、壮介！ TV見たか！』

電話の向こうで洋はかなり興奮した様子だった。声の大きさに壮介は思わずケータイを耳から遠ざける。

「いや、今起きたとこだから見てない。何なんだ？」

すると洋はさらに興奮した様子で壮介に話す。

『何やってんだバカ！ 早くTVつけろ！』

「バカとはなんだよ。判ったって」

壮介はケータイを持った手とは反対の手でリモコンを持ち、少し躊躇いながらもスイッチを押す。

そこに映し出されたのは……、ある公園だった。

画面の右上にテロップが出ていたので、壮介はそこを読んでみる。

「疑惑の大学生、首吊り自殺を計る……」

その時、壮介の背筋にゾクツとする冷たいものが走る。

壮介は耳からケータイを離し、TVのコメンテーターの話を聞く。『先日興橋で起こった留学生殺人について、何らかの事情を知っていると見られ、行方が判らなくなっていた男子大学生が今朝、現場近くの公園で首を吊って自殺を計っていたのを発見。大学生はすぐに病院へ搬送され、現在意識不明の重体です。これにつきまして……』

それを聞いた壮介は、ただ頭が真っ白になった。

何らかの事情を知っていると見られ、行方が判らなくなっていた男子大学生……、これは萩田亮平のことであることは、ほぼ間違いなかった。

「もしもし……、見たよ……」

壮介はケータイを耳につけ、洋に話す。その声に力はない。

『マズいよ、壮介……マズい』

洋の声にも力はなかった。そして壮介はケータイを切った。そして、

「くそつたれがあつ！」

やり場のない怒り・焦り・哀しみ……、

激情に駆られる壮介、それを表現するかのように、ケータイをベツドの上へ思い切り投げつけた。

二

その日、壮介は大学へは行く気にはなれなかった。壮介は部屋のベツドの上で仰向けになり、ただただ無機質な天井を見つめていた。時折ベツドの脇に置いてあるケータイのバイブレーションが震えるが、壮介はそれに全く応えなかった。何もしたくない、考えたくない……、壮介の表情からはそれが滲み出ていた。

そして夕方……、カーテン越しに西陽が差し込んでくる時刻、また壮介のケータイが震える。今までは三十秒くらいでそれは止まるが、今回は一分以上震え続けている。

さすがに音が煩わしくなったのか、壮介はそのケータイを手にする。ディスプレイには洋の名前が出ていた。

ケータイのバイブレーションは依然震え続ける。遂に壮介はボタンを押し、ケータイを耳にあてる。

「もしもし……」

『おう、俺だ』

ケータイから洋の声が漏れる。

『今、お前のアパートの前にいる。行ってもいいか？』

「今からか？」

洋の問いに壮介は顔をしかめる。

『ああ、今日の講義のレジュメとか、持ってきてやったよ。大丈夫か？』

洋の「大丈夫か？」には二つの意味があつた。今から行ってもいいかということ、亮平の一件についてのこと。かなり気落ちして

いる壮介を洋なりに気遣っていた。

「ああ、大丈夫だ？」

壮介はベッドから起き上がる。どちらに対しての「大丈夫」と受け取ったのだろうか？

『ああ、判った。じゃあすぐそっちへ行くから』

そう言うつと洋は電話を切った。壮介はテーブルにケータイを置く。
「はあ……」

壮介はため息をついた後、頭をガリガリと掻きまわった。そして大きく背伸び。

「いつまでのへこんでもしょうがない……てか」

そして壮介は立ち上がり、部屋の鍵を持って外へと出る。壮介の向かった先は一階の集合ポスト。壮介の部屋は六階なので、エレベーターで下まで降りる。

「おう、お迎えか？」

下まで降りると洋が丁度やって来たところだった。壮介はオートロックの解除ボタンを押し、洋を中へと入れた。

「ま、何とか元気そうだな」

洋は壮介の表情を見てニヤリと笑う。

「フン、ちよつと待ってる。郵便物見たいから」

壮介はそう言いながら自分のポストを開ける。するとチラシ数枚の他に郵便物が三通投函されていた。

「これはケータイ料金の請求書で、これは電気代ね。あと、これは何だ」

壮介の目に留まったのは茶色の封筒。差出人は書かれていない。

「何だそれ？」

差出人不明の封筒、洋も興味深そうに覗き込む。

「取りあえず部屋に戻ろうぜ。開けるのはそれからだ」

壮介はそう言いエレベーターのボタンを押し、六階へと移動。洋と共に自分の部屋へと戻る。

「相変わらず男クセえ部屋だな。カノジヨさんの苦勞が判るぜ」

洋は部屋に入るとその雑然とした風景に苦笑いを浮かべる。

「うるせえよ。おい洋、そのハサミ取ってくれ」

壮介は洋からハサミを受け取り、その刃を封筒に入れる。封書の中には、数枚の便箋。壮介はそれを封筒から取り出して開いてみた。そして便箋の内容を読む前に、壮介はその左端に書かれた文字を見て壮介は大きく目を見開いた。

便箋の一番左端にあったもの、それはこの手紙を出した差出人の名前。

そしてその差出人の名前……、そこには萩田亮平と書かれてあった。

「おい、洋……」

壮介はそれを洋にも見せる。そして洋も壮介と同じ反応を見せる。

「こ、これは、一体……？」

壮介は便箋に書かれてある内容に食い入る。そして一行読んでいく度、壮介は頭をガリガリと掻きまわっていた。

三

「壮介、

お前がこれを読んでいる時、俺はもうこの世にはいないかもしれない。バカな俺を許してくれ。」

俺がこれをお前に書いたのは、お前だけには俺の気持ちを伝えておきたかったからだ。あれだけ心配させてしまったんだ、俺にはちゃんと話す義務が、お前に対してはあると思った。

あの晩、あの月の出ていなかった夜。俺はお前と再会した。その時お前が俺に訊ねてきたことに、俺は答えることができなかった。許してくれ、あの時の俺にはどうしても答える度胸がなかったんだ。でもとうとうここまでできてしまった。だから、俺はせめてお前だけ

にでも答えなければいけないんだ。聞いてくれ。

あの時話した通り、俺とリン・エイミは恋人同士だった。最初は店の客と従業員だった。そのうち俺が段々とリンに入れ込んでいつてしまった。あの当時、俺は前の恋人と別れた直後で心が荒んでいた。そんな時にあのリンと出会った。まるで荒野に咲く一輪の美しくて優しい花のようだった。俺はそれこそ毎日リンへと会いに行っていた。そしてそうしているうちに、リンも俺のことを好きになってくれた。俺とリンは恋人同士になった。客と風俗エステ嬢……、普通ならありえないし、あつてはならないことなのかもしれないが、俺たちはそんな関係にのめり込んでいったんだ。俺はリンを愛し、リンも俺を愛してくれた。

その時、俺は気付いたんだ。俺にとってリン・エイミという女性 が全てになっていたことに。俺はリンという存在が傍にいるから生きていけるんだって、そう思うようになっていった。実際そうだった。それまで特に楽しくもない人生だったし、前の恋人と別れてからは特に毎日を生きたのが苦痛だった。友達のお前にこんなこと言うのはダメなのかもしれないが、事実そうだったんだ。俺の進む道は何も見えない。俺は真っ暗な闇の中にボツンと取り残されて、これからどうしていいのか判らない、どこへ進んで行っているのかも判らない、そんな状態だったんだ。そんな状態の時、俺はリンに出会った。真っ暗な闇に、ほのかな光が灯った感じだった。まるで夜空に光る月のように、俺の足元を照らしてくれていた。

その光があるから俺は歩いていけた。リンがいるから俺は自分に希望が持てた。リンがいたから、俺は、怖くなかったんだ。

それが、それがこんなことになってしまって、リンはいなくなってしまった。

そして俺は知ってしまった。それは俺があの時答えられなかった、お前からの問い。

それを知ってしまった時、俺の目の前は今まで以上に真つ暗になつてしまった。これから進もうとすべき道も、自分の足元すらも見えなくなってしまった。

もう俺はどうしようもなくなってしまったんだ。

壮介、もしお前ならこういう場合、どうする？ 頭の良いお前なら、きっと誰もが傷つかない最良の答えを導き出せるんだろうな。残念ながら、俺にはそれができない。

もし、お前にそれができるのならば、俺の代わりにこの悲劇を終わらせてくれ。誰も悲しまない形で真相を導き出してくれ。頼む。

最後に、本当にすまなかった』

萩田 亮平

便箋を持つ壮介の手がプルプルと震える。

「萩田君……」

便箋の全てに目を通した時、壮介の目には涙が溜まっていた。それは洋も同じで、メガネをとり目頭をこすっていた。

「そんなことが、萩田君にあつたなんて……」

洋は目頭をこすりながら話す。それに壮介は頷く。二人は亮平からの深層を、何とも複雑な想いで受け止めている。もう何を言ったらいいのか判らない。

ただ一つ、壮介は心に決めたことがある。それはこの事件の真相を導き出すということ。

「この事件の真相を導き出す。それが萩田君から俺に伝えられた心

からの願い。それを叶えてあげなければ」

壮介その想いを胸に便箋と封筒を握り締める。

その時だった。壮介は封筒の感触に違和感を覚えた。

「あれ、まだ何か入ってる？」

壮介は封筒の口を逆さに向ける。するとあるものがポトンと下に落ちた。

「何だ？」

洋がそれを床から拾い上げる。

「これは、吸殻……？」

封筒の名から出てきたもの、それはタバコの小さな吸殻だった。殆ど吸われた状態で非常に短くなっている。

「萩田君、何でこんなものを封筒に……？」

洋はそう言い首を傾げ、それを壮介に渡す。

「今はまだよく判らない。ただ、これが俺たちに残してくれた萩田君からのメッセージ」

壮介はその小さな吸殻を見つめ、頭を掻く。

「絶対に、真相まで辿り着いてやる。萩田君たちのために」

そう言い、壮介はその吸殻を封筒の中へと戻した。

亮平の告白と吸殻。これから必ず真相を導き出す。それが壮介の瞳にはそんな決意が滲んでいた。

第十二章 真相の尻尾

—

亮平が自殺を計つてから、ワイドショーでは再びリンの事件を大きく取り上げ始めていた。亮平は実名こそ報道されていないものの、友人知人なら誰もが一目瞭然できる報道の内容で、大学や自宅前には記者やレポーターの姿があつた。

また報道によると、自殺を計つた亮平は依然意識不明の重体。あと少し発見が遅ければ、亮平の自殺はその時点で成功していたということになる……。家族・友人、そして警察関係者は亮平の奇跡的な回復を神に祈る想いで待ち望んでいた。

そんな友人の一人である壮介は、興橋のはずれにある喫茶店の前にいた。壮介はしきりに喫茶店の中の様子を覗き込んでいる。

「あ、発見発見！」

そう言つと壮介は喫茶店の中へと入り、奥のテーブル席へと進んでいった。そして立ち止まったテーブル席にはタバコを燻らしてコーヒーを飲む一人の女性が座っていた。

「あら、アンタは……」

「ども、久し振りです。冴子さん」

そこにいたのは仁藤冴子だった。壮介はそう言つと冴子とテーブルを挟んで向かい側の席に座った。

「いやあ、捜しましたよ。キューピットの方に行つたんですけどいなくて、もしかしたらこつちかなつて思つて来ました」

席に着くなり壮介は頭をガリガリと搔く。それを見た冴子はコーヒークップを手前に引く。

「それは別にいいけど、何か用かしら？」

冴子はタバコを吸いながら訊ねる。すると壮介は両手をテーブル

に置く。

「例の件、勿論ご存知ですよ。」

すると冴子のタバコを吸う手が止まる。そしてしばらくの間があった後、冴子はタバコを灰皿へギョツと押し付けた。

「ボタンちゃんの件のこと？ 勿論知っているわよ。ＴＶで報道されているくらいだけれど」

「自殺を計った男についてのことも？」

壮介の質問に、今度は冴子が頭を掻く。

「ああ、名前は知らないけれど……、ボタンちゃんのお客でコレでしょ？」

そう言つと冴子は親指を立てて壮介に見せる。

「まあ、そうですね」

壮介は苦笑いを浮かべながら、自分のポケットを探る。

「冴子さん、実はちよつと見て頂きたいものがあるんですけど」

そして壮介はポケットから茶封筒を取り出し、テーブルの上へと置いた。

「これが何なの？」

冴子は不思議そうな表情でその茶封筒を見つめる。壮介はその茶封筒を再び手に取り、中からあるものを取り出す。

それは小さなタバコの吸殻だった。

「冴子さん、俺はタバコを吸わないのでよく判らないですが、この吸殻を見て何か気付くことはありませんか？」

「はあ……？」

冴子は突然の質問にやや戸惑う。しかしすぐに質問の意味を理解し、その吸殻をまじまじと見つめる。

「随分吸い込んだ吸殻ね。私ならここまで吸わないわ、これじゃ苦くてしょうがないわ」

ひとしきり見終わると冴子はカバンからタバコとライターを取り出し、それに火をつけた。

「ということは、これはかなり特徴的な吸い方をする人間のものと

「いわけですね」

「壮介が身を乗り出して訊ねる。」

「まあそうなるわね。タバコの吸い方なんて人それぞれだけれど、ここまで短くなるまで吸う人はあんまりいないと思うわ」

「そうですか。こういうのって、男性に多いですか？」

「そう言いながら壮介はその吸殻を茶封筒の中へ大事にしまう。その姿を見て冴子は思わずプツと吹き出す。」

「さあ、女の子でもヘビースモーカーはいるからね。逆に図体のデカイ男が軽いタバコ吸ってたりするし。あ、そうそうウチの嵯峨野なんてあんなイカつい顔してタバコが全然ダメなんだから」

「冴子はそう言いながらケタケタと笑う。反対に壮介は真顔でうんうんと頷いていた。」

「その嵯峨野さんですが、最近はどうですか？」

「壮介の問いに、冴子は一瞬眉間に皺を寄せた。」

「あつちはあつちで大変みたいよ。例の男の子が自殺しちゃってから、今度は自分の方に警察の聴取が集中しているみたい。ま、売春ブローカーで散々悪行を重ねてきたんだから、ヤキが回ってきたのよ」

「すると壮介は再び身を乗り出す。」

「あの、冴子さん。その嵯峨野さんと会えたりはできないですかね？」

「はあっ？」

「突拍子もない壮介からのお願いに冴子は声を上げる。冴子は吸いかけのタバコをまた灰皿へグリグリ押し付ける。」

「別に構わないとは思っけど、会ってどうするのよ？」

「色々聞きたいんです。リン・エイミについて。この事件を解くためにはどうしても必要なんです。お願いします！」

「はあ……」

「壮介は冴子に向かって手を合わせる。それを見た冴子はやや困った表情を浮かべるが、すぐに口元は緩む。」

「判ったわ。嵯峨野には声かけといてあげる。明日の夜だったら大

丈夫だと思うから、明日の夜七時くらいに、この喫茶店に来なさい。会わせてあげるわ」

それを聞いた壮介は一気に破顔する。

「いや、ありがとうございます」

そう言いながら壮介は何度も冴子に頭を下げる。そんな光景を見た冴子は一瞬ポカンとするもすぐ笑顔になる。

「全く、アンタってホント変わった男子ね」

そして壮介は席から立ち上がり、再度冴子に向かって頭を下げる。

「では、すみませんがよろしくお願いします。では失礼します」

「はいはい、判りましたよ。じゃね」

そう言うつと壮介は冴子の元を後にした。入れ替わるように店のマスターがお盆にお冷を乗せてやってきた。

「あれ、帰っちゃったのかい」

すると冴子は新しいタバコを取り出す。

「ええ、ホント変わった子だね。でもいい子よ」

冴子はそう言うつと目を細めながらタバコに火をつけた。

二

その日の夜、壮介と洋は亮平が入院している病院に来ていた。二人は集中治療室の前の長椅子に並んで座っていた。

『面会謝絶』

扉の前にはそう書かれたプラカードがぶら下がっている。壮介と洋はそのプラカードを見つめていた。

「そりゃ面会できないに決まってるだろって」

洋が壮介の方を向き吐き捨てる。すると壮介もため息をつき頭を掻く。

「そりゃ、そうだなあ……」

壮介もこの結果は想定範囲内だったようで、その表情に落胆の色はない。むしろ「当たり前か」という様子であった。

「できたら大一番の前に一目その顔を見ておきたかったんだが……、これじゃしょうがねえか」

壮介はそう言いながら頭をガリガリと掻いた。それを聞いた洋は半ば呆れメガネを手に取り、大きくため息。

「判っていながら……全くバカ負けだよお前さんには」

洋のため息をつく姿を見た壮介はニヤリと笑う。

「まあ、お前とも腐れ縁だな。大学に入ってから。今回の件、とことん付き合わせちまつてるな」

「もうここまで来たら乗りかかった船だ。俺もこの一件の真相ってもんを拝ませてもらわねえと、割りに合わないからな」

「ああ、随分寒空の下ご一緒してもらったからなあ」

壮介はそう言いながらニヤニヤと笑う。それにつられて洋もニヤニヤ笑う。

そして洋の表情から柔らかさが消える。

「で、どうなんだ壮介。大一番っていうくらいなんだから、目星ついてんだろ」

すると壮介は頭を掻きながら笑う。しかしその笑いはどこなくもの悲しげだ。

「ああ、なんとなくだけれどな。まだ何とも言えない。ただ、あと少して真相の尻尾が掴めるところまで来ているんだと思う」

そう言いながら壮介は懷からあの茶封筒を取り出す。

「萩田君が残してくれたメッセージ、無駄にはしない。決して……」

壮介はその茶封筒を見つめる。その中には亮平が壮介たちに残した物の数々が入っていた。

「明日の夜、フラワーの店長だった人と会う。そこでリン・エイミについて詳しい話を聞く。それできつかけが掴めれば……」

壮介の目には決意が漲っていた。

「明日は俺バイトが入ってて行けないけど、頑張れよ」

洋は壮介の肩をポンと叩く。すると壮介も洋の肩を小突き返す。
「でもあの店長、一時期メディアで真犯人みたいな扱われ方してたけど、実際どうなんだろうな？」

すると壮介は首を振る。

「さあ、どうかな、あの人は犯人ではないと思う」

壮介は素っ気無く言い放った。

「そうか、お前さんが言うんだったら、そうなんだろうな。お前さんの勘は当たることでも有名だからな」

洋が口元を緩めながら再び肩をポンと叩く。壮介も口元を崩す。

「うるせえよ。さ、行こうぜ」

壮介は洋の肩を小突くと長椅子から立ち上がり、出口へと歩き始める。それを追うように洋も長椅子から立った。

「うー、今夜も寒いぜ」

病院の外へ出た二人は一気に身体を縮ませる。冬の夜の空気は澄み、吐く息は白い。

ふと壮介は夜空を見上げる。そこにはオリオンをはじめとする冬の星座の数々、

そして満月が、白く、美しく輝いていた。

「月光か……。これも萩田君が俺たちに教えてくれたことだな」

壮介が月を見上げながら呟く。

「無事でいてくれよ、萩田君……」

壮介は一度病院の建物の方へ振り向いてそう言い残し、洋と共に病院を後にした。

三

次の日の夜、壮介は冴子との約束の時間に、あの喫茶店へと訪れた。喫茶店へと入ると、カウンターに冴子ともう一人厳つい顔をした男性が座っていた。

冴子は壮介がやってきたことに気付くと席から手を振る。

「どうも、こんばんは」

壮介はカウンター席に座る二人に頭を下げる。冴子の方はにこやかに応じるが、男性の方は壮介に見向きもしなかった。

「冴子さん、この方が……」

すると冴子は笑顔で頷き、男性の肩を叩く。

「ほら、店長！」

すると男性は壮介の方を一瞥する。その眼光は鋭く、一見してその筋の人のようだ。

「この人が、フラワーの店長だった嵯峨野さんよ。こう見えてけっこうシャイなのよ」

冴子の紹介に、嵯峨野は小さく舌打ちをする。ここにいることはあまり本意ではないという様子だった。

そんな嵯峨野の様子を見た壮介は冴子に手招きをする。

「何？」

「あんまり機嫌良くなさそうなんですけど……」

壮介は冴子に耳打ちをする。すると冴子はニヤツと笑う。

「まあね、連日警察やマスコミから尋問質問責めだからね。いい加減うんざりしているのよ。ま、今回の件は私がちゃんと話つけたいあけているから大丈夫よ」

それを聞いた壮介は申し訳なさそうに頭を下げる。冴子は壮介の肩をポンポンと軽く叩き、カウンターの席に座るよう促した。

「どうもはじめまして、新谷壮介といいます」

壮介は再び嵯峨野に向かって頭を下げる。嵯峨野は壮介の方へ視線を向ける。

「……………」

ただ無言で壮介の方を見ている……否、睨みつけている。

「ちよつと今日は嵯峨野さんにお伺いしたいことがあって、今日……」

すると突然嵯峨野が大きく咳払いをした。それに壮介は思わずビ

クツとする。

「ああ、前置きはいいいから、とつとと話始めてくれ。聞きたいのはリンのことだろ？」

嵯峨野は面倒くさそうな表情で壮介に話す。それを聞いた壮介は思わず苦笑いを浮かべ頭を掻く。

「といっても、俺が知っていることは毎日ＴＶで流れているぞ。連日警察やマスコミに重箱のスミつつかれる思いで尋問されたからな」
嵯峨野はその時のことを思い出しているのか表情を曇らせる。

「そうですか……。リン・エイミという人はどういう女性だったのですか？」

すると嵯峨野は「またか」というような表情を見せる。

「だから、いい娘だったよ。客の反応も良かったし。でもその客とデキてたとは思わなかったけどな」

「そ、そうですか……」

壮介は頷きながら頭を掻く。それを見た嵯峨野はカウンターの上手でパツパツと払う。

「それでは……。リン・エイミはタバコを吸いましたか？」

すると嵯峨野は壮介の顔を見る。彼にとってそれは意外な質問だったようだ。

「いやあ吸わないよ。というか吸わせなかった」

「吸わせない？ 何故？」

すると嵯峨野は冴子の方をチラリと見る。それに対し冴子は視線を逸らす。

「俺、タバコ嫌いだね、臭いが全然ダメなんだよ。あとタバコ臭い娘はお客の反応も悪い。だから基本的にはうちで働いてる娘はタバコを吸わない。コイツ以外はな」

そう言つて嵯峨野は冴子の背中を小突く。すると冴子は嵯峨野の肩を叩き返した。

「それじゃまるで私がお店のお荷物みたいじゃない」

「実際、指名取れてなかったろ」

冴子が頬を膨らませると嵯峨野は皮肉たっぷりの口調で返す。

「では、リン・エイミの周囲の人間でタバコを吸う人は？」

「いるんじゃないかな。プライベートなことは細かく知らないけれど、いてもおかしくはないだろ」

嵯峨野がどうでもよさそうな顔で答える。反対に壮介は真剣な眼差しで臨んでいた。

「ちゃんと答えてあげなさいよ」

しばらくそのようなやり取りが続いた後、冴子が口を挟む。嵯峨野の投げやりな物の言い方を見かねたのである。

「だってコイツ、どうでもいいようなこと聞いてくるんだもんよ。」

こっちは同じこと何十回って答えてんだからさ」

イライラしているのか嵯峨野が声を荒げる。それを見た冴子は眉間に皺を寄せる。

「もう、相変わらずなんだから。ゴメンね、新谷君」

すると壮介は苦笑いを作る。

「いえいえ、わざわざ来て頂いているわけですから……」

そして壮介の表情が先程の真剣なものに戻る。

「ではすみません、あと一つだけ聞きたいことがあります、よろしいですか？」

「ああ……、もうこれが最後だぞ」

そして壮介は一度頭をガリガリと掻いた後、大きく息を吸った。

「警察やマスコミ関係以外で、俺の他にリン・エイミについて訊ねてきた人はいましたか？」

壮介の問いに嵯峨野は一瞬意外そうな表情を見せる。そして嵯峨野は過去の記憶を掘り起こしているのか虚空を見つめていた。

「ああ、そういえば……一人いたな。あれは、たしか……」

その後壮介は嵯峨野たちと別れ、喫茶店を出た。

この日の夜は生憎の雨模様。傘をさしながら壮介は興橋の街を行く。

「よし、見えてきたぞ。よし、よし……」
壮介は掴んだようだ。この事件の真相の尻尾を……。

第十三章 対峙

—

「まだ、駄目なんですか……」

病院の一室の前で、ある女性が頂垂れていた。

「そうなの、まだ意識が戻らなくて、先生は今晚が峠とことです。ご家族には先生から連絡してもらっています」

看護士が頂垂れる女性に説明し、しばらくしてその場を立ち去った。その女性は顔を上げ、病室の扉を見つめる。その瞳は涙を溜めているためか潤んでいた。

「……………」

女性は目頭を袖で拭い、その扉へと近付く。そしてゆっくりとドアノブに手をかける。

カチャ……………」

しかし女性はノブを完全に回しきらず、あと少しのところまで手を止めた。そしてゆっくりとその手を離した。

「はあ……………」

女性は扉の前で再び頂垂れる。その手を扉に充てる。中の様子が気になって仕方がないのか。しかし扉の向こうから音は何もしない。「亮平君……………」

女性がその部屋の中にいる人の名を呼ぶ。その口調から彼女はとても彼に会いたがっているようだった。しかしそれは叶わない。

亮平は依然として意識が戻らず、面会謝絶の状態が続いている。彼がここに運ばれてきてからもう三日が経過しようとしていた。

女性はしばらくそのままの状態でその場に留まっていた。その姿はまるで扉の向こうにいる人へテレパシーを送っているかのようだった。

萩田亮平の回復、それはこの一連の事件に関係する人間の誰もが

願うところであつた。

この扉に向かう女性、川奈晶子もその人間の一人である。彼女は亮平の回復を家族や警察以上に願っていた。

「亮平君……、お願い……」

晶子は扉に向こう側にいる亮平にむけて呟く。それは心の底からの想いであつた。

その時、静寂に包まれていた病院の廊下に、カツカツと足音が響く。その足音は複数で晶子の方へと近付いてきていた。

晶子もその足音に気付き、顔を上げて扉から離れる。

「……………」

晶子は足音のする方をじっと見つめる。その足音は明らかにこちらの方へと向かっている。

「家族の方かな？」

晶子はそう呟く。するとその次の瞬間、足音の正体が姿を現す。

それは若い男性二人組であつた。

そしてその二人の男性に、晶子は見覚えがあつた。

「新谷さん……、藤田さん……？」

足音の主は壮介と洋であつた。二人は晶子の姿を見つけるとお互いに顔を合わせる。

「ああ、晶子さん。ここにいらしていましたが。丁度良かった……」

壮介が笑顔で近付いてくる。晶子はそれをやや警戒し、顔を強張らせる。

「どうしました？」

その表情の変化に気付いた洋が晶子に訊ねる。すると晶子は首を軽く振った。

「いえ……、突然だったもので。お見舞いですか？ 生憎ですが……」

「面会謝絶なのは知っています。ただ、俺たちの目的はそれだけじゃないんですよ」

晶子が言い終わる前に壮介が口を挟む。

「俺たちは、貴女に会いたかったんです」

壮介の後ろで洋が丁寧な口調で話す。

「わ、私に？ な、何か御用ですか？」

突然のことに晶子は動揺する。寒々しい病院の廊下、晶子の頬が紅潮する。

「ええ、色々お話ししたいことがあったんです。あと聞きたいこともね」

壮介が一步、晶子の方へ近付く。

「よろしいですか？」

その問いに、晶子は答えに戸惑った。壮介の目、それは彼女が今まで見たことのないものであったからだ。しかしこの場面において彼女がそれを拒むことはできなかった。

「はい、わ、わかりました」

その言葉を聞いた壮介は笑顔で頭を掻いた。

「そうですか。いやぁありがとうございます」

ここで壮介は洋と再び顔を合わせる。洋もそれを喜んでいるのか口元が緩んでいたが、その目は笑っていなかった。

「ではここでは何ですので、場所を変えましょうか」

そして壮介は踵を返し、廊下を歩き始める。

晶子はそれを追うように、ゆっくりと歩き始めた。

二

三人は病院の外へと出て、近くにある終夜営業の喫茶店へと入った。時刻は午後八時とまだまだ宵の口で店内は客で賑わう時間帯ではあったが、この日に限っては店内に客はまばらだった。

喫茶店へ向かう途中、晶子は夜空を見上げていた。この日は冬晴れとなり、夜にはたくさんの星座と月が輝いていた。

「……………」

晶子はそんな夜空を見上げながら、壮介らと共に喫茶店へと入っ

た。

店内に入ると壮介と晶子は先に席へと着き、後で洋が冷水の入ったコップ三つと灰皿をお盆に載せてやってきた。

「川奈さんもコーヒーで良かったですね？」

洋が訊ねると晶子は静かに頷く。すると洋はお盆に載せてきたものをテーブルに置き、その場を後にした。

「あの、話って何ですか？」

晶子はお冷に口をつけてから壮介に訊ねる。すると壮介は笑いながら頭を掻く。

「あ、それは洋が戻ってきてからにしましょうか。ま、遠慮せずに」
壮介はそう言うのと灰皿を晶子の方へ押しやる。しかし晶子は今そのような気分ではないのかそれを横へとやった。それを見た壮介は再び頭を掻いた。

程なくして洋が今度はコーヒーを三つお盆に載せて戻ってきた。

「お盆、置いとけよ」

壮介が洋にそう指示を出す。洋はコーヒーをそれぞれの前へと置いて壮介の横に座った。

「じゃあ壮介、はじめようか」

洋がそう言うのと壮介は大きめの咳払いをした。

「川奈さん、突然すみません。ちよっとお伺いしたいことがあって来て頂きました」

壮介が晶子に向かって頭を下げると合わせるように洋も頭を下げる。それを見た晶子はやや緊張した面持ちながらも、壮介たちが顔を上げると同時に頭を下げた。

「まず今回の件について、今までで判ったことをお話します」

壮介は冴子や嵯峨野との話の内容、そして壮介たちが亮平と再会したこと、亮平から受け取った手紙のことまで晶子に話した。

壮介は自分たちが知っていることの殆どを晶子に話した。「ある一件」を除いては。

壮介が話をし終わったとき、晶子の瞳は涙で溢れていた。

「そ、そんな……亮平君……」

晶子の頬を涙がつた。晶子はそれを袖で拭った。

そして壮介はポケットからあるものを取り出す。それは亮平から受け取った手紙であった。壮介はそれを晶子に見せた。

「これが萩田君の言わば、遺書です。俺たち以外、まだ誰も読んでいません」

晶子はそれを受け取る。そして読み進めていくうちにその瞳から大粒の涙が零れ落ちてきた。

「亮平君……、亮平君……」

その涙が手紙の上にポタツポタツと滴り落ちる。壮介と洋はその光景を無言で見つめている。

「私、全然知らなかった……。亮平君の気持ち、全然知らなかった……」

とうとう晶子は両手で顔を覆ってしまった。テーブルの上に置かれた所々湿った手紙。壮介はそっとそれを自分の元へと引き戻した。

「川奈さん、これを踏まえてお聞きしたいことがあります」

壮介は手紙を仕舞うと晶子に問う。晶子はハンカチで顔を拭いてから、静かに頷いた。

「萩田君とリン・エイミの関係を、貴女は知っていましたか？」

すると晶子は目を閉じ、首を何度も振った。

「いいえ、別れてからのことは、全然知りませんでした。でもこんなことになるなんて……」

すると壮介は腕を組んで黙り込む。隣に座る洋もそれは同じだった。

先程まで涙を流していた晶子は、少し落ち着いたのかコーヒーに口をつける。

それを見た洋のメガネが光る。

「どうぞ、遠慮なさらずに」

洋はテーブルの端にあった灰皿を晶子の元へと置く。

すると晶子はすこし意外そうな表情を見せるもしばらくの間があ

つてから少し口元を緩める。

「す、すみません……では一本だけ……」

そう言うと晶子はカバンからタバコとライターを取り出し、タバコに火をつけた。

「すみません、迷惑ではないですか？」

晶子の問いに壮介と洋はブンブンと首を振る。

「いえいえ大丈夫です。どうぞごゆっくり」

晶子は笑顔を作り、タバコを吸い続ける。その間、壮介と洋は大学の講義の話など他愛もない話をしていた。

そしてしばらくして晶子はタバコを吸い終わり、吸殻を灰皿へと押し付けた。

それを確認した洋は灰皿を手前へと引く。その光景に晶子はまた意外そうな表情を見せる。

「壮介」

「ああ……」

すると壮介はポケットから茶封筒を取り出した。

「あの、それが何か……」

壮介たちの不審な行動に晶子は何事か訊ねるが、二人はそれを無視する。

壮介は茶封筒からあるものを取り出す。

「！」

その「あるもの」を見た時、晶子の表情が一変する。その表情の変化を壮介たちは見逃さなかった。

壮介が茶封筒から取り出したもの、それは亮平が手紙と共に壮介へと送った吸殻であった。

晶子はその吸殻を見て表情が一変した。

何故なら……、

「これと、灰皿に残っているそれ、殆ど一緒ですね」

壮介がその事実を晶子へ突きつける。

「川奈さん、実はもう一つ、貴女にお聞きたいことがあるんです

けれど、よろしいですか？」

壮介の言葉に晶子はやや表情が青ざめ声を発しない。しかし壮介は続けた。

「或る寒い日の夜、リン・エイミを殺したのは、貴女ですね」

三

「な、な……」

表情が青ざめ、唇がガタガタと震え始めた晶子に対し、壮介は淡々と話し始める。

「まず川奈さん、貴女は俺たちに嘘をつきましたね。貴女は、リン・エイミのことを知っている」

その言葉に晶子は何も反応することはない。否、できない。

しかし壮介は話を続ける。

「実は昨日、俺はリン・エイミが働いていたフラワーの店長さんと話をしました。その中で俺は店長さんに、自分以外でリン・エイミについて訊ねてきた人間がいたかと聞きました。するとリン・エイミが殺される数日前に、彼女についてのことをしつこく訊ねてきた女性がいたということを覚えていてくれました」

そして壮介はポケットから一枚の写真を取り出した。そこには亮平と一緒に笑顔で写る晶子の姿。それはまだ二人が交際している時に撮影された写真のようであった。

「これは先日萩田君のご家族から借りてきた、萩田君の部屋にあった写真です。店長さんに確認したところ、ここに写っている女性で間違いないと、そう言っていました」

そう言うつと壮介はその写真を引っ込める。そして壮介は晶子の瞳をじっと見据える。晶子の視線はどこを見ているのか判らない状態だった。壮介は大きく息を吸い、話を続ける。

「そして、このタバコです」

壮介は茶封筒から取り出したタバコの吸殻と、灰皿に押し付けられた吸殻を手に取り見比べる。

「或る人が言っていました。タバコの吸い方は人それぞれだと……。言い換えれば人によつては特徴的な吸い方をする人も中にはいるということ。まさに、このタバコの吸殻のことではないですか？」

壮介はその殆ど同じ形をした吸殻を晶子の前に出す。それに対し晶子は思わず目を逸らす。壮介はその反応を見てから話を続ける。

「実はこの吸殻も萩田君から送られてきました。萩田君が何故この吸殻を送ってきたのか、その真意は定かではありません。ただ……」

壮介は晶子が吸った方の吸殻を灰皿へと戻し、亮平から送られてきた吸殻を自分の手元へと置く。

「俺はあの時、萩田君に犯人を知っているかどうか訊ねました。そしてその答えとして、萩田君はこの吸殻を俺に送ってきました。俺はこのタバコを吸った人間が犯人だと、そう解釈しました」

すると今まで視線を逸らしていた晶子がじつと壮介の方を見る。

「それが……どうして私だと？」

それは喉の奥から搾り出してくるような声であった。顔を下に向け、相変わらず唇はプルプルと震えている。

「以前お会いした時に、貴女は今日と同じようにタバコを吸っていましたね。その時、随分短くなるまで吸うんだなと思っていました。それがこの吸殻を見て、ピンときたんですよ」

そう言いながら壮介は頭をガリガリと掻いた。

「そしてもう一つ、ここをよく見てください」

壮介は小さなタバコの吸殻の先端部分を指差した。横にいる洋はそれを凝視するが、晶子はそれを見ているのか見ていないのか視線が定まっていない。

「ここ、僅かではありますが、赤いものが見えますね。川奈さん、よく見てください」

壮介の呼びかけに、晶子はようやく視点を壮介の持つ吸殻に合わせる。

「おそらくこれは血です」

それを聞いた洋のメガネが光る。

「壮介、もしこれが……」

洋がそれを言いかけるが、壮介はそれを制止する。

「これはあくまで俺たちの推測です。もしこれが殺されたリン・エイミのものだったら……」

その時、

バン！

突然晶子が両手でテーブルを叩いた。驚いた周りの客が壮介たちの方を振り返る。

「……………」

その後三人はしばらく沈黙する。しかし壮介と洋は決して絶句しているのではない。晶子は何を話すのかじっと待っているのだ。

そしてしばらくして、晶子の唇がまた震え始める。

「もう、もう……やめて……」

晶子は下を向き、震える声で話す。

「お願いだから、もう……やめて……………」

それを聞いた壮介と洋は視線を合わせる。そして壮介はその吸殻を茶封筒の中へと戻した。

「もう一度お聞きします。リン・エイミを殺害したのは、貴女ですね、川奈晶子さん……」

壮介は静かにそう訊ねる。

「……………」

それに対し、晶子は何も話さない。何も答えない。

ただ、とても哀しそうな嗚咽が、晶子の今の心境を物語っていた。

そして、しばらくして……、

晶子は、静かに、その首を、縦に振った……。

第十四章 真相

—

寒い冬の夜。風はないもののその肌寒さは身に凍みる。吐く息は白く、肌はピンと張る。

寒い冬の夜は空気がとても澄んでいる。空を見上げれば無数の星空と白く輝く満月が一つ……。それはとても神々しく、美しいもの。そしてその月は真つ暗な夜の足元を、じつと優しく照らす。

そんな夜、病院の待合所に三人の影。新谷壮介、藤田洋、そして川奈晶子だった。この三人以外、この場所には誰もいない。

「最初は、亮平君からの電話でした。あの時、突然会いたいと言われ、指定された場所に行ってみると彼がいて、すぐに言われました。別れようって……」

病院の待合所、グレーの長椅子に座り、晶子は静かに語り始める。それを壮介と洋は一度目線を合わせてから、黙って聞いていた。

「最初は亮平君が何を言っているのか信じられませんでした。嘘じゃないかって思いました。だってついこの間まで、とても仲良く過ごしていたのに。確かに、些細なケンカは何度かしたことあったけれど、急にあんなこと言い出すんだから……。私、わたし……」

晶子は当時のことを一つ一つ思い出しながら話す。彼女にとって辛い思い出なのかもしれないが、彼女の言葉はそれらを全て吐き出してしまふかのように止まらない。

「……………」

そんな晶子の姿を、壮介たちは見つめる。壮介は一度頭をポリポリと掻く。

「最初、私は嫌だと言いました。だって意味が判らなかったから。亮平君には何度もその理由を聞きました。でも、もう終わったとい

うだけで、納得できる理由は教えてくれませんでした」

ここで一度晶子の言葉が止まり、鼻をすする。感極まっているのかその瞳はやや潤んでいた。

壮介と洋はここで一度顔を合わせるが、ここでは何も言葉を発しなかった。

「それで……別れた後、私はひとしきり泣いてから考えました。何故亮平君は私と別れたいなんて言い出したのかって。帰ってからずっと、ずっと考えていました」

晶子は自分の手をぎゅっと握る。

「そして私は或る考えに行き着いたんです。亮平君、他に好きな人ができたんじゃないか……って」

晶子は鼻をグズグズとすすりながら話す。そして瞳から雫が床に零れ落ちた。

「それから私は、亮平君には他に好きな人ができた、そうとしか思えなくなっていました。そしてその相手が誰なのか、知りたくなりました」

壮介はカリカリと頭を掻く。そしてこのタイミングで壮介が口を挟む。

「それで貴女は萩田君の周囲を調べ始め、リン・エイミの存在に気付いた」

壮介の言葉に晶子は小さく頷く。

「フラワールの店長である嵯峨野さんと接触したのも、その頃ですね？」

壮介の問いに晶子は再び小さく頷く。

「萩田君の周囲に、一人の女性がいることが判り、私はその女性について知りたくて色々調べました。調べてみるとその女性は風俗店で働いていたんですが、私にとってそんなことはどうでもよかったです」

ここで晶子は再び手をぎゅっと、先程より強く握り締める。

「私にとって重要だったのは、何故亮平君がその女性と親密になっ

たのかということでした。それについても調べていました……。そして、そのうちに……」

その時、今まで下を向いて話しかけていた晶子が顔を上げる。その頬は涙でくしゃくしゃになっている。しかし、その瞳には今までにはない力が宿っていた。その力を感じ取った壮介と洋は顔を合わせる。

「変わっていましたが、恨みに……。私の亮平君を奪った女性に対し、怒りや哀しみ、そして言い様のない憎しみを抱くようになっていました。亮平君がその女性に傾倒している様子を聞く度に、その想いがどんどんどんどん高まっていました……」

話し続ける晶子、虚空を見つめどこを見ているのか判らない。しかし、その瞳にはまるで小さな炎が灯っているようだった。壮介と洋はその晶子の「想い」を、ひしひしを感じていた。

「その後、リン・エイミとどのようにして接触したのですか？」

洋が晶子に訊ねる。すると晶子は洋の方を見ずに話し始める。「最初は探偵でも雇おうかと思いました。でもその女性、亮平君を私から奪った女の顔を自分の目で拝みたくて、亮平君を密かに尾けていました。そして或る日の晩に、その女の姿を見ました」

晶子の言葉に、次第に「恨み」の想いが強くなってきていた。

「そしてあの晩、働いている風俗店から出てくるところを呼び止めました。話があるって……。そうしたらその女どうしたと思います？」

晶子は二人の方を全く見ず、二人に訊ねる。壮介と洋はその反応に困惑する。しかしその回答を待たずに晶子は話し始める。

「急いでいるからダメだ。カレが待っているからって、あの女そんなこと言っただけですよ。だから私は……」

ここで晶子の口元が緩む。まるで、笑っているように見える。

「私は言っちゃったんですよ。私は萩田亮平の恋人だって。そしてその女、すごくビクリした顔だった」

その後も、晶子は口元を緩めながら話し続ける。

壮介は頭をガリガリと掻きまわった。

二

「殺すつもりは……なかったんです……」

晶子は両手を見つめながら話す。おそらく、あの時のことをおもいだしているのだろうか。

「最初はちゃんと話し合うつもりでした。あの潮見川沿いの道へと移動し、私が亮平君の本当の恋人だ。だからもう亮平君とは会わないでほしいって……そう伝えました」

「でも、リン・エイミはそれを拒んだ」

壮介が話すと晶子は小さく頷いた。

「それで私は脅かすつもりで、家から持ってきたナイフをあの人にちらつかせたんです。本当はこんなことしたくなかったけれど、そうしたらあの女、怖がってもう亮平君には近付かない……そう思ったんです」

「でも、リン・エイミはそういう態度は取らなかった」

晶子の話を聞いた壮介が静かに呟く。すると晶子はゆっくりと壮介の方に視線を向ける。その表情はとても恨めし気なものであった。「あの女、それでも亮平君とは別れない……ときっぱり私に言ってきて、そんな脅しには負けないとも言ってきました」

話し続ける晶子の歯がガタガタと震え始める。そして、とうとうその時を迎える。

「そうしたらあの女、カッとなって私の持っていたナイフを取り上げようとしてきたんです。それでしばらく揉みあっている際に……」
「つい、カッとなって刺してしまった……と」

壮介がその先を答える。すると晶子は首をガクンと垂れた。

「しかも刺した箇所は運悪く左胸。おそらく、即死だ」

壮介の後に洋が冷たく言い放つ。それに対して晶子は何の反応も示さなかった。しかし事の重大さは晶子が一番痛感していた。

そして晶子は今まで見つめていた両手で顔を覆う。

「本当に、殺すつもりは、なかったんです……」

そして晶子は両手で顔を隠したまま黙り込んでしまった。その姿を見た壮介と洋は同時に大きなため息をついた。

「……………」

壮介は一度頭をガリガリと掻き毟る。そして口を開く。

「川奈さん、一つ質問があります」

それに対し、晶子は無言。壮介の声が耳に届いているのかどうか判らない。しかし壮介は続ける。

「貴女はリン・エイミと話合っている際、タバコを吸っていましたか？」

すると晶子は両手で顔を覆ったまま小さく頷いた。

「その吸殻が、現場に落ちていたんですね。そしてその吸殻が、萩田君が俺に送ってくれた吸殻というわけです。これが何を意味しているか、貴女には判りますか？」

すると晶子の肩がプルプルと震えだす。その反応を見て、洋が壮介に視線を送る。

「見ていたんですよ。貴女とリン・エイミのやり取りの一部始終を……………」

「つまり、川奈さんがリン・エイミを刺し殺す、その場面をね」

壮介の後に洋が付け加える。すると晶子の震えは次第に大きくなっていく。

「貴女がリン・エイミを殺害・潮見川へ遺棄して立ち去った後、萩田君はその現場へ行った。そして現場にこの吸殻が落ちていたことに気付いた。そしてこの吸殻を見て、誰がリン・エイミを殺したのかを、知ってしまったんですよ」

「うつ、うつ……………」

顔を覆う両手の間から、晶子の鳴咽が漏れ始める。もう全てが崩れ落ちる寸前であった。

「それを知った時の萩田君の苦しみ、哀しみ、痛み……………どれ程のも

のだったか、俺たちには想像もつかない」

話す壮介と洋の目にも光るものがあつた。洋はメガネを外し、目尻を拭つた。

「ただ川奈晶子さん、貴女が行つたことで奪つてしまつたのは、リン・エイミの命だけではない……萩田君の心の光すらも奪い取つてしまつたのです。それは萩田君にとつて、死ぬこととおなじだったのではないでしょうか……」

壮介が言い終わつた後、ついに晶子の想いが決壊した……。

「うわわあああーっ！」

晶子はその場に崩れ落ち、そして地面に這いつくばりながら、泣いた、泣いた……。

「亮平君！ 亮平君！ ああああ……！」

洋は立ち上がり、床で泣き崩れる晶子の身体を抱きかかえ、長椅子に座らせる。その後ろで壮介も立ち上がつていた。

「川奈晶子さん、俺たちは警察じゃない。自分の身の振り方は、ご自身で決めてください。ただ……、これ以上、誰も傷つかない選択を、お願いします」

そう言つと壮介は踵を返し、その場を去つた。

「洋、行くぞ」

「ああ……」

洋はメガネをかけ直し、壮介の後を追つた。

「うつ……、うつ……」

そしてその場には両手で顔を覆い、今だ後悔に暮れる晶子だけが残された……。

三

病院の待合所から離れた壮介たちが向かつた先は、亮平の病室だった。

面会謝絶の札が下がっているが、壮介はその扉を開けた。

「おいおい……」

この行為に洋はさすがに戸惑ったが、壮介が中へと入ってしまったので、洋も後を追うように入ってしまった。

亮平は未だ意識不明の重体。亮平の身体には様々なチューブが繋がれ、その周囲には幾つもの機械が置かれていた。

壮介は亮平の横を通り、窓側へと移動する。そして窓から上空を見つめる。

「壮介？」

その姿に洋は訝しげな表情を浮かべる。

「洋、こっちへ来てみるよ」

壮介は窓の方へ手招きをする。洋は少し緊張した面持ちで壮介の方へ近付く。

「何があるんだ？」

壮介に促されるままに洋は窓の外を眺める。するとそこには白く輝く満月があった。

「月が、どうかしたのか？」

洋が訊ねると壮介はニヤリと笑う。

「月光……だよ、洋」

そして壮介は再び上空の月を見つめる。

「あれが月光、あれがあるから、真っ暗な夜をほのかに照らしてくれる。どんな暗闇でも足元を照らしてくれる光があるからこそ、歩いていけるんだ」

壮介はベッドの上で眠る亮平に視線を移す。

「萩田君にとつての月光とは、リン・エイミだった。そして川奈晶子にとつての月光が、萩田君自身だった」

「なるほどな……。萩田君という月光を失った川奈晶子は、暗闇に包まれて、遂に暴走してしまった」

洋は窓越しに上空を見上げる。満月の光がこの病室にも微かに、確実に届いている。それを壮介も、洋も感じ取っていた。

「なあ壮介、一つ聞いていいか？」

洋が壮介に訊ねる。すると壮介は視線で「何だ？」と合図を送る。「どうせお前さんのことだ。前から川奈晶子に目星をつけていたんだろ？　いつからだ？」

すると壮介は苦笑いを浮かべながら頭を掻いた。

「前に、俺と洋で川奈さんに初めて会った夜のこと、覚えているか？」

すると洋はしばらく考え込んだ後、手を横に振った。

「あの当時、萩田君はリン・エイミ殺害の重要参考人として扱われていた。しかしその名前と顔写真は公表されていなかった」

そこまで聞いた洋はピンときたようで、指をパチンと鳴らした。

「なるほど、萩田君の名前が伏せられている状況下で、何故萩田君がリン・エイミ殺害に関わっていることを知っていたのか……ってわけか」

「そういうこと」

壮介はそう言うつと再び頭を掻きながら窓の外を見上げた。

「月光……か」

そして壮介は亮平の方をみる。

そして壮介は呟いた。

「萩田君、ごめんな……」

エピローグ

あれから数ヶ月。寒い冬もだいぶ和らぎ、もうだいぶ陽が長くなつた或る日のこと……。

潮見川の「あの現場」に三人の人影があつた。

新谷壮介・藤田洋、そして萩田亮平だつた。

亮平はあの後、しばらく危険な状況が続いたものの、奇跡的に回復し、つい数日前に無事退院した。しかし首には痣が生々しく残っていた。

亮平が退院して、今日が壮介たちと再会の日となつた。再会はそれこそお互い涙を流すくらい嬉しいものだったが、三人はそれもそこそこにこの場所へと向かつた。

あの日以降、事態は急激に動いた。あの晩の翌日、川奈晶子は警察へ自首。リン・エイミ殺害を告白した。

晶子は現在も拘置され、警察の聴取を受けている。晶子は聴取の際、後悔・懺悔の言葉を繰り返し述べ、涙を流しているとのことだった。

汚れきつた潮見川を眺める三人。全てはここから始まつたのだ。

「なあ壮介、洋、お前たちには迷惑をかけたな、すまない……」

亮平は二人に向かつて頭を下げる。すると壮介たちは顔を合わせ、両手を横に振る。

「いやいや、こっちこそ……」

壮介は頭をガリガリと掻く。

「こっちこそ、あの約束守れなかつた」

「約束？」

その言葉に亮平はキョトンとした表情を作る。

「あの手紙だよ。あの手紙で、萩田君は俺に誰も悲しまない形で真

相を導き出してくれって言ってたけれど、そうはならなかった……
ごめん、本当に」

壮介は亮平に向かって深々と頭を下げた。

「壮介……あ、頭を上げてくれ」

頭を下げ続ける壮介に亮平が近寄る。

「気にするな。どんなことでも、真相を導き出してくれたんだ。俺はお前に感謝しているよ」

「そうだ、気にするなよ壮介」

亮平に続き、洋も壮介の肩をポンと叩く。顔を上げた壮介の瞳には涙が滲んでいた。

「ごめん、本当にごめん……」

壮介は目尻を袖で拭う。

「気にしないでくれ壮介。でないと俺もまた悲しくなるから……」

亮平は優しく壮介の肩を叩く。そしてようやく壮介の顔に笑顔が戻り、頭をポリポリと掻いた。

「そう、そうでなくちゃな」

亮平にも笑顔がこぼれる。あれから亮平はだいぶ明るくなった。

「萩田君は、これからどうする？」

洋が亮平に訊ねる。すると亮平は視線を下に落とす。

「晶子のことか？ 待つよ。出てくるまで」

その言葉を聞いた洋は口元を緩める。

「今度は俺があいつのことを支えてあげなきゃいけない。俺がリンに支えられていたように。その日がくるまで、俺はどんなことがあっても待ち続けるよ」

亮平は力強く、そう言った。それを聞いた壮介はニカツと笑った。
「そうか！」

壮介は頭をガリガリと掻き、亮平の肩をポンと叩いた。

「行くか、そろそろ。お前バイトの時間だろ？」

壮介が洋に話す。

「そうだな。そろそろいいかな萩田君？」
すると亮平は軽く頷いた。

「行こうか」

三人は「あの現場」から歩き始めた。

「そっぴいや洋、あの入覚えてるか？」

「あの入って誰だよ？」

「ほら、キューピットであつた仁藤冴子さんだよ」

すると洋はピンときた様子。

「ああ、あのオバちゃんがどうかしたのか？」
すると壮介はニヤリと笑う。

「この間偶然道でばつたり会つたんだよ。あの入この街を出て行くんだってさ。何でももう一度神戸へ戻つて自分の店始めるらしいわ」

壮介が笑いながら話す。蚊帳の外の亮平はポカンとした表情。

「いやあ、お前さんを搜している時に、色んな出会いがあつてね。普通に生活してたら出会えないような入とも出会つちまつたよ」

洋も笑いながら亮平に話した。

笑いながら潮見川沿いの道を歩く三人。

太陽はもうだいいぶ西の方角へと傾いている。

そしてその反対側で、白い満月が薄つすらと輝きはじめていた……。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4285j/>

新谷壮介シリーズ 月光

2010年10月8日14時16分発行